

現代物理学入門

平成 22 年 2 月 24 日

目次

第 I 部	特殊相対論	7
第 1 章	特殊相対論の基礎	9
1.1	歴史的序論	10
1.1.1	Newton 力学と Galilei の相対性原理	10
1.1.2	光学	11
1.1.3	光速度の測定	12
1.1.4	電磁気学	13
1.1.5	エーテル仮説	14
1.2	Michelson-Morley の実験	15
1.3	特殊 Lorentz 変換	17
1.4	特殊 Lorentz 変換からの結果	21
1.4.1	同時刻の相対性	21
1.4.2	Lorentz 収縮	23
1.4.3	走っている時計の遅れ	24
1.4.4	振動数、波長の変換則	24
1.4.5	速度の合成則	26
1.5	実験的検証	27
第 2 章	テンソル算	29
2.1	一般の Lorentz 変換	29
2.2	スカラー、ベクトル、テンソル	32
2.2.1	スカラー	33
2.2.2	反変ベクトル	33
2.2.3	共変ベクトル	33
2.2.4	テンソル	34
2.3	テンソルの演算	35
2.3.1	和	35
2.3.2	スカラーとの積	36

2.3.3	テンソル積	36
2.3.4	テンソルの微分	36
2.3.5	縮約	36
2.3.6	内積	37
2.3.7	テンソルのタイプの変換	37
2.3.8	ベクトルの分類	38
2.3.9	光円錐	38
2.3.10	ダランベール演算子	39
第3章	相対論的力学	41
3.1	相対論的運動学	41
3.2	力学の基礎方程式の相対論的修正	43
3.3	エネルギーおよび運動量	44
3.3.1	静止エネルギー	45
3.3.2	4元運動量と質量	46
3.3.3	実験事実	47
第4章	相対論的電磁気学	49
4.1	真空中の Maxwell の方程式	49
4.1.1	ポテンシャルと波動方程式	50
4.1.2	Lorentz 条件	50
4.1.3	ゲージ変換	51
4.1.4	ゲージ変換と Lorentz 条件	51
4.2	Maxwell の方程式の相対論的書き替え	52
4.2.1	電荷保存則	52
4.2.2	ポテンシャル	52
4.2.3	電磁場 \vec{B}, \vec{E}	53
4.2.4	まとめ	54
4.3	Maxwell の方程式の相対論的書き替え (II)	54
4.3.1	電磁場のエネルギー運動量テンソル	55
4.3.2	電磁場のエネルギー、運動量保存則	56
第II部	量子力学	59
第5章	導入	61
5.1	歴史的序論	61

5.1.1	波動(電磁波)の粒子性	61
5.1.2	固体比熱	66
5.1.3	原子のスペクトル	67
5.1.4	粒子(電子)の波動性	68
5.1.5	角運動量の量子化	69
5.2	応用、発展	69
第6章	前期量子論	71
6.1	原子の構造	71
6.1.1	アボガドロ数	71
6.1.2	電子	71
6.1.3	陽子	71
6.1.4	α 粒子	72
6.1.5	中性子	72
6.1.6	Zeeman 効果	72
6.1.7	α 線の散乱実験	73
6.2	作用変数、断熱不変量	73
6.3	Bohr の理論	74
6.3.1	Bohr の理論	74
6.3.2	量子化条件	75
6.3.3	例	75
6.4	de Broglie 波	77
6.4.1	de Broglie 波と量子化条件	77
6.4.2	粒子と波の二重性	77
6.5	その後の発展	77

第I部
特殊相对論

第1章 特殊相対論の基礎

物理学の歴史の中で数世紀に渡り力学、光学、電磁気学は別々に発展してきたが、19世紀後半に Maxwell¹ の理論と Hertz² の実験により電磁気学と光学の統一がなされた。

電磁気学と力学については、根本的に変換則が異なるため、そのままでは統一ができない。

光が波動であることを説明するため、波動の媒体としてエーテル (aether) 仮説が唱えられた。真空中では光は横波のみで縦波成分がないので、エーテル仮説で光を説明するためには剛体で非圧縮性だが天体の運航には影響を及ぼさないなどさまざまな不自然な点があった。これらは一応電磁波の発見と共に解決されたが、なおエーテルが静止している絶対空間の問題が残った。しかし地球のエーテルに対する運動は Michelson³-Morley⁴ の実験によって否定された。その後、Lorentz⁵ 収縮仮説などが提案された。

根本的にこれらの見方をかえ、電磁気学と力学の統一を果たしたのは20世紀初頭の Einstein⁶ の特殊相対論による。その後、さらに重力との統一をした一般相対論へと発展した。今や相対論は、素粒子論や宇宙論など他の物理学の基礎となるばかりでなく、GPS や航空機のレーザージャイロなど日常生活にも応用されている。

¹James Clerk Maxwell (1831-1879) イギリスの科学者 (物理、数学)

²Heinrich Hertz (1857-1694) ドイツの科学者 (物理、電気技術)

³Albert Abraham Michelson (1852-1931) アメリカの物理学者、1907年ノーベル物理学賞

⁴Edward Morley (1838-1923) アメリカの物理学者

⁵Hendrik Antoon Lorentz (1853-1928) オランダの物理学者、1902年ノーベル物理学賞

⁶Albert Einstein (1879-1955) ドイツ生まれの理論物理学者、1921年ノーベル物理学賞

1.1 歴史的序論

1.1.1 Newton 力学と Galilei の相対性原理

Newton⁷ 力学の3法則

1. 外力が作用していないとき、全ての物体は静止、または一定速度で直線運動する。
2. 物体に外力が作用しているとき、物体の加速度は外力に比例する。

$$\vec{f} = m\vec{a} \quad (1.1)$$

3. 作用と反作用の大きさと方向は等しく、向きは反対である。

Newton の法則のうち、最初のを慣性の法則とよぶ。実は座標系によっては慣性の法則は必ずしも成り立たつわけではない。慣性の法則が成り立たないように見える座標系の例は、回転座標系での運動、重力中での自由落下する座標系である。慣性の法則が成り立つ座標系を特に慣性系 (inertial system) とよぶ。

古典的相対原理

Galilei⁸ の相対性原理

「どの慣性座標系を基準にとっても Newton の力学法則は同じ形式に書き表される。」

2つの直角座標系 S と S' を考える。 S 系の各軸と S' 系の各軸とはそれぞれ平行で、 x' 軸は x 軸に重なっているものとする。時刻は $t = 0$ の瞬間に $t' = 0$ のように設定する。また $t = 0$ では2つの直角座標系は一致しているとする。 S 系から見たとき S' 系は x 軸の正の方向に一定の速度 v で運動しているものとする。

S を基準にしたとき、時刻 t における質点の位置 (直角座標) を x, y, z 、同じ瞬間に S' から見た座標を x', y', z' とすると (図 1.1)、

$$x' = x - vt, y' = y, z' = z, t' = t \quad (1.2)$$

⁷Isaac Newton (1643-1727) イギリスの科学者 (物理、数学、天文学)

⁸Galileo Galilei (1564-1642) イタリアの科学者 (物理学、天文学、数学)

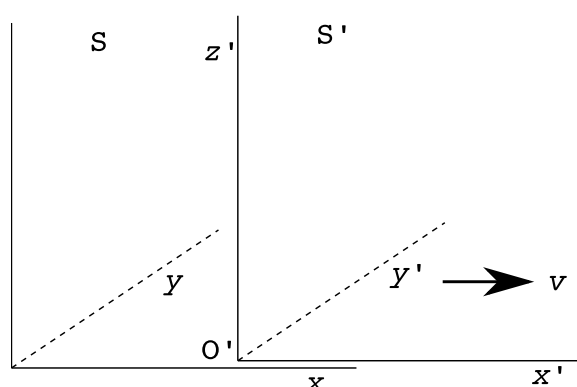


図 1.1: ガリレイ変換

したがって S 系および S' 系から見た、速度および加速度は

$$\frac{dx'}{dt'} = \frac{dx}{dt} - v, \quad \frac{dy'}{dt'} = \frac{dy}{dt}, \quad \frac{dz'}{dt'} = \frac{dz}{dt}, \quad (1.3)$$

$$\frac{d^2x'}{dt'^2} = \frac{d^2x}{dt^2}, \quad \frac{d^2y'}{dt'^2} = \frac{d^2y}{dt^2}, \quad \frac{d^2z'}{dt'^2} = \frac{d^2z}{dt^2} \quad (1.4)$$

となる。S を慣性系とすれば Newton の運動方程式

$$m \frac{d^2 \vec{x}}{dt^2} = \vec{f} \quad (1.5)$$

が成り立つ。ここで \vec{f} は S 系から見た力を表す。S' 系から見た力を \vec{f}' とし、力は速度に無関係で $\vec{f}' = \vec{f}$ とすれば、(1.4) と (1.5) から

$$m \frac{d^2 \vec{x}'}{dt'^2} = \vec{f}' \quad (1.6)$$

となり、S' 系から見た質点の運動についても (1.5) と全く同じ形の法則が成立している。

Galilei の相対性原理の重要な前提はどの慣性座標系でも時間の進みは一樣 (絶対時間) ということである。

1.1.2 光学

1. R. Hooke⁹

⁹Robert Hooke (1635-1703) イギリスの科学者

光の波動説 (1660 年代)

光の波動の媒体を「エーテル」“aether” とせず、回折と薄膜の干渉現象を研究した。

2. A. Newton

1670-1672 光学についての講義

「光学」“Opticks” (1704)

光の粒子説 (corpuscular theory of light) を主張、しかし光の回折を説明するため波動説も併用。

屈折、色とスペクトル、ニュートンリング

3. C. Huygens¹⁰

ホイヘンスの原理 (1678)

4. T. Young¹¹

Young の実験 (1805 年ころ)

複スリットによる干渉実験を行い、スクリーン上に干渉縞を観察、光が波動であることを実験的に確認した。

5. A.J.Fresnel¹²

回折現象を数学的に説明、実験とも良く一致した (フレネル回折)。

光が波動というだけでなく、偏光の振舞から横波 (振動方向が進行方向に対して垂直) であるという結論を得た。

複屈折現象の説明。

1.1.3 光速度の測定

1. Rømer¹³ は木星の衛星イオの掩蔽の周期のずれから光速度を測定した (1676)。光速度が有限であることの初めての測定でもある。

ただし、光速度が有限と言う結論はすぐには受け入れられず、後述の Bradley の研究で学会の合意を得られるようになった。

¹⁰Christiaan Huygens(1629-1695) オランダの科学者 (物理学、天文学、数学)

¹¹Thomas Young(1773-1829) イギリスの科学者 (物理学、生理学、エジプト学)

¹²Augustin-Jean Fresnel (1788-1827) フランスの科学者 (物理学、土木技師)

¹³Ole Christensen Rømer (1644-1710) デンマークの天文学者。

2. Bradley¹⁴ は地球の公転に伴う恒星の光行差から光速度を測定した (1728) .
3. Fizeau¹⁵ は回転歯車と半透明鏡を組み合わせた装置を使って光速度を測定した (1849) . 初めての地上での光速度測定である .
4. Foucault¹⁶ は回転鏡と半透明鏡を組み合わせた装置を使って光速度を測定した (1850) . また、空気中と水中の光速度を測定し、水中の光速度の方が遅いことを確認した . これによりニュートン流の光の粒子説は決定的に否定された .

また、1862 年には装置を改良してさらに高精度の光速度の測定値 (現在の値とは 0.6 % の誤差) を得た .

1.1.4 電磁気学

1. Cavendish¹⁷ の実験

Cavendish は 1773 年に 2 つの導体球を使って、電荷どうしに働く力が逆 2 乗則であることを確認した . ただし彼はこの結果を公表せず、1873 年に Maxwell により再実験、公表された .

2. Coulomb¹⁸ の法則 (1780 年代)

捻りばかりを用いた実験で、電荷どうしに働く力が逆 2 乗則ということを見出した .

ただし、Coulomb の実験精度は前述の Cavendish のものより劣る、現在でも電荷どうしに働く力を直接精度良く計測することは難しく、Cavendish や Maxwell の実験を改良したものが逆 2 乗則の確認に使われている .

3. Ampère¹⁹ の力の法則 (1820)

2 本の導線に電流を流すと力が働く .

¹⁴James Bradley (1693-1762) イギリスの天文学者 .

¹⁵Armand Hippolyte Louis Fizeau (1819-1896) フランスの物理学者 .

¹⁶Jean Bernard Léon Foucault (1819-1868) フランスの物理学者 .

¹⁷Henry Cavendish (1731-1870) イギリスの科学者 (化学、物理)

¹⁸Charles-Augustin de Coulomb (1736-1806) フランスの物理学者

¹⁹André-Marie Ampère (1775-1836) フランスの物理学者、数学者

4. Ampère の循環法則 (1826)
電流の回りに磁場が生じる。その磁場を周回積分すると電流の大きさと関連付けられる。
5. Faraday ²⁰
近接作用、誘導起電力発電機、モーター
6. Maxwell の方程式 (1864),
Faraday の近接作用のアイデアを数式の形に表した。
その結果、電磁波の速度が光速度と一致し、また横波であることから光は電磁波の1種であると議論した。
7. Hertz の電磁波の実験 (1886-1887)
電磁波を発生、検出し、電磁波が直進、屈折、反射、回折、偏波(横波の性質)などの性質を持つことを確認した。また電磁波の速度が光速度と一致することを確かめた。

1.1.5 エーテル仮説

光の波動説では、波動が伝わるには媒質が必要と考えられ、それはエーテル(aether)と呼ばれていた。

Fresnel の理論ではエーテルは弾性体と考えられたが、光速度を説明するには非常に剛性率が高くなければならず、また光は横波のみで縦波成分はないことが知られているが、このためには全く圧縮されない媒質である必要がある。そのようなエーテルで満たされた空間の中を天体が自由に運動するのは不自然と考えられた。Maxwell の方程式と Hertz の実験以後は、電磁波をエーテルの振動とみなすことで上述の難点は一応解決された。

しかし、速度の合成則は粒子説と波動説では異なり、波動ではドップラー効果(Doppler²¹effect)に見られるように媒質の静止系に対して波動の速度は一定である。同様に、エーテルの静止系は特別な意味を持つはずである。実際、Maxwell の方程式から導かれる波動方程式

$$\left(-\frac{1}{c^2} \frac{\partial^2}{\partial t^2} + \frac{\partial^2}{\partial x^2} + \frac{\partial^2}{\partial y^2} + \frac{\partial^2}{\partial z^2} \right) \mathbf{E} = 0 \quad (1.7)$$

²⁰Michael Faraday (1791-1867) イギリスの科学者(物理、化学)

²¹Christian Andreas Doppler (1803- 1853) オーストリアの数学者、物理学者。

は、Galilei 変換とは両立せず、特定の慣性座標系でのみ成立するようにみえる。そのような慣性系を絶対系と呼ぶことにしよう。

エーテルの静止している絶対系と地球との相対運動の検出が次の課題となった。地球は太陽の回りを約 30 km/s で公転しているため、エーテルと相対運動しているはずである。つまり、地球の進行方向とそれに垂直な方向では、光の速さは 30km/s 程度異なるはずである。

1.2 Michelson-Morley の実験

マイケルソン (A. A. Michelson) は地球がエーテルの絶対系に対してどのように運動しているかを求める実験を行った。その結果はエーテルの存在を否定するものであった。

1. Michelson の実験 (1881) ポツダム (ドイツ)

この時点ではまだ精度は不十分であったが、後の装置の原型となるものである。

Maxwell が当時の地上での光速度計測法 (光の往復) では、地球のエーテルに対する運動をはかろうとすると、 $(v/c)^2$ の効果を見ることになり精度的に無理と書いたことにたいして、この実験を工夫した。

2. Michelson-Morley の実験 (1887) クリーブランド (アメリカ)

精度の向上のために以下の改良をした。1 辺 1.5m の正方形で厚さ 30cm の岩石の上に光学系を設置した、水銀で装置全体を浮かべて水平に保ちかつ滑らかに回転するようにした。光路を何度も往復させ光路長を伸ばした。また温度変化の影響を避けるため、地下室で実験を行った。

図 1.2 はマイケルソン-モーレイの実験装置を簡略化して示したものである。光源 L から出た光は半透明鏡 M によりその一部分は反射されて M_2 にむかい、ここで鏡 M_2 に反射されて再び M に戻り、 M を通り抜けて干渉計に入る。また L から光で半透明鏡 M を通過したものは M_1 に直進し、ここで鏡 M_1 に反射されて再び M に戻り、 M で一部反射されて干渉計に入る。前者の光路をたどった光を L_2 、後者の光路をたどった光を L_1 と呼べば、 L_1, L_2 は干渉して干渉縞を生じる。

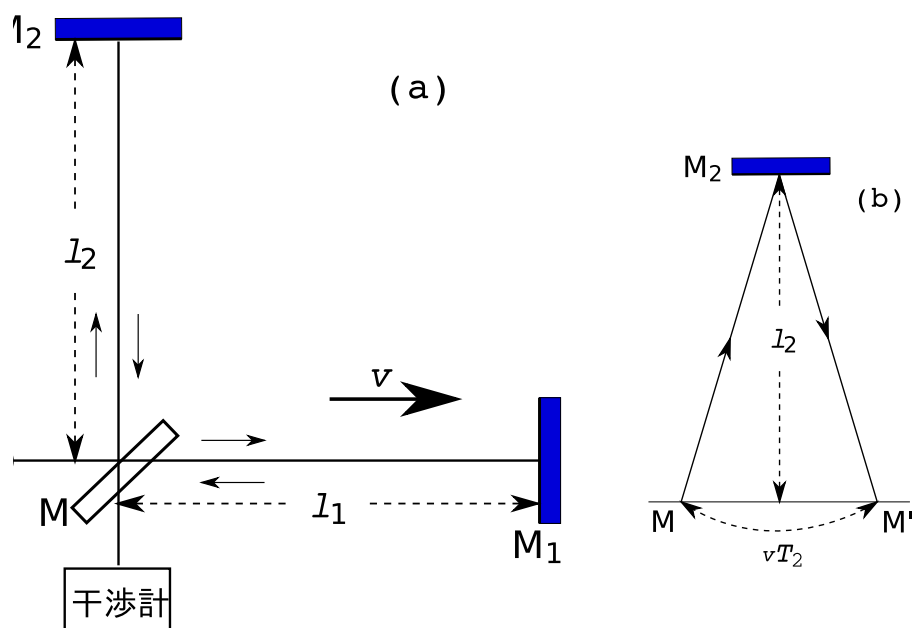


図 1.2: マイケルソン干渉計: M は半透明鏡.

この現象を絶対系から見たとき、 L_1, L_2 にどれだけの光路差が生じるかを計算してみよう。

この装置は地球上のある地点の水平盤上に置かれており、装置は絶対系に対して地球とともに $\overrightarrow{MM_1}$ の方向に一定の速さ v で直線運動をしているとする。

光 L_1 が MM_1 を往復するのに要した時間は

$$T_1 = \frac{l_1}{c-v} + \frac{l_1}{c+v} = \frac{2l_1/c}{1-\beta^2}, \quad \beta = \frac{v}{c} \quad (1.8)$$

光 L_2 が MM_2 を往復するのに要した時間は

$$T_2 = \frac{2\sqrt{(l_2)^2 + (vT_2/2)^2}}{c} \quad (1.9)$$

これを解けば

$$T_2 = 2\frac{l_2/c}{\sqrt{1-\beta^2}} \quad (1.10)$$

L_1 と L_2 の光路差 Δ は

$$\Delta = c(T_1 - T_2) = 2\left(\frac{l_1}{1-\beta^2} - \frac{l_2}{\sqrt{1-\beta^2}}\right) \quad (1.11)$$

次に装置全体を水平盤上で点 M を中心として 90 度回転させる。\$L_1\$ と \$L_2\$ の光路差 \$\Delta'\$ は

$$\Delta' = c(T'_1 - T'_2) = 2 \left(\frac{l_1}{\sqrt{1-\beta^2}} - \frac{l_2}{1-\beta^2} \right) \quad (1.12)$$

したがって装置の回転の始めと終わりでは光路差に

$$\delta = \Delta' - \Delta \approx -(l_1 + l_2)\beta^2 \quad (1.13)$$

だけの違いが生まれる。波長 \$\lambda\$ の光を考えると位相差は、

$$\Delta\phi = 2\pi \frac{\delta}{\lambda} \approx -2\pi \frac{(l_1 + l_2)}{\lambda} \beta^2$$

である。そこで干渉計に、干渉縞の移動が起こるはずである。しかし実験で観測された干渉縞の移動は、エーテル仮説の理論値の \$1/40\$ 以下であった。

なお、Michleson-Morley の実験では以下の技術的理由から白色光の零次の干渉縞を用いたため、干渉計の 2 つの腕の長さは等しくなければならない (\$l_1 = l_2\$)。単色光では多数の干渉縞が観測されるが、波長の整数倍の不定性が伴う。白色光では零次以外の干渉縞は波長によって位置が違うので、色づいて見える。零次の干渉縞だけが白または黒い縞となる。

1.3 特殊 Lorentz 変換

Michelson-Morley の実験からは、光速度はあらゆる慣性系で同一である。しかしこれは Galilei の相対性原理とはあきらかに矛盾する。そこで、Galilei の相対性原理の背景にあった、絶対時間の概念をあきらめることでこの 2 つを両立できないか考察してみよう。

次の相対性原理と光速度不変の原理

1. 全ての物理法則はどの慣性系でも同等
2. 光速度不変の原理「真空中の光の速さは光源や観測者の運動状態に無関係」

を元にして、二つの慣性系 \$S\$ と \$S'\$ の間を結ぶ関係式を求めよう。

単純化のため、二つの慣性座標系 \$S\$ と \$S'\$ として、図 1.1 に示されたものを考える。

1. まず相対性原理から S 系から見た場合に1個の質点が等速直線運動をしているとすれば、S' 系からも等速直線運動をしているように見えるはずである。そのためには x', y', z', t' が x, y, z, t の1次式であらわされているばよい。
2. xy 面と $x'y'$ 面、 xz 面と $x'z'$ 面は常に一致したままであるから、 $z = 0$ なら $z' = 0$ 、また $y = 0$ なら $y' = 0$ が x, t に無関係に成立する。したがって次の関係式が成り立つ。

$$y' = \kappa(v)y, \quad z' = \kappa(v)z \quad (1.14)$$

κ は x, y, z, t には無関係な比例定数だが、 v には依存してもかまわない。 y, z' の比例係数が同じであるのは、空間の等方性にもとづく。同じく空間の等方性から v を $-v$ にしても κ は変わらない。したがって $\kappa(v)$ は $|v|$ の関数である。

逆に S' 系から S を見た場合、S は x' 軸の負の向きに速さ v で走っているので、

$$y = \kappa(-v)y', \quad z = \kappa(-v)z' \quad (1.15)$$

が成立する。したがって (1.14), (1.15) から

$$(\kappa(|v|))^2 = 1 \quad \text{すなわち} \quad \kappa(|v|) = \pm 1 \quad (1.16)$$

となる。ここで $v \rightarrow 0$ とすれば $y' \rightarrow y, z' \rightarrow z$ となるはずなので、結局 $\kappa(|v|) = 1$ となる。したがって

$$y' = y, \quad z' = z \quad (1.17)$$

がえられる。

3. 次に光速度不変の原理を考えよう。いま $t = t' = 0$ の瞬間に S の座標原点 O で光源が点滅したとする。その閃光は時間 t がたつとともに O を中心に球面状に速さ c でひろがっていく。この現象を S から観測すると、点 P (座標 (x, y, z)) に光の波面が到達する時刻を t とすると、

$$s^2 \equiv x^2 + y^2 + z^2 - (ct)^2 = 0 \quad (1.18)$$

がなりたつ。これを S' 系から眺める。点 P は S' 系では座標 (x', y', z') で表現される。光の波面が点 P に到達する時刻を S' 系で t' とすると、光速度不変の原理から

$$s'^2 \equiv x'^2 + y'^2 + z'^2 - (ct')^2 = 0 \quad (1.19)$$

となる。

次に、 x', y', z', t' が x, y, z, t の 1 次式である (相対性原理) ことと、(1.18) がなりたてば (1.19) も成り立つべきである (光速度不変の原理) という要請から、 $s^2 \neq 0$ について

$$s'^2 = \alpha(v)s^2 \quad (1.20)$$

が成り立っている。 $\alpha(v)$ は x, y, z, t には無関係で、 v には依存してもかまわない。空間の等方性から前述と同じ推論で

$$s^2 \equiv x^2 + y^2 + z^2 - (ct)^2 = x'^2 + y'^2 + z'^2 - (ct')^2 = s'^2 \quad (1.21)$$

が導かれる。

4. (x, t) と (x', t') の関係を整理すると、

$$x^2 - (ct)^2 = x'^2 - (ct')^2 \quad (1.22)$$

ここで

$$x' = ax + bt, \quad t' = fx + gt \quad (1.23)$$

とおく。 a, b, f, g は座標には無関係で v のみの関数である。

(1.23) を (1.22) に代入して、任意の x, t について成立するという要請から

$$\begin{aligned} a^2 - c^2 f^2 &= 1 \\ ab - c^2 fg &= 0 \\ g^2 - b^2/c^2 &= 1 \end{aligned} \quad (1.24)$$

が導かれる。この解は、

$$a = \pm \cosh \theta, \quad b = \mp c \sinh \theta = -ca \tanh \theta, \quad (\text{複号同順}) \quad (1.25)$$

および

$$f = \pm \frac{1}{c} \sinh \theta, \quad g = \mp \cosh \theta = -\frac{cf}{\tanh \theta} \quad (\text{複号同順}) \quad (1.26)$$

である。ここで、 θ は

$$\tanh \theta = -\frac{b}{ca}$$

で与えられる。

さらにパラメーター θ を求めるため、次の考察をする。S' 系の座標原点 O' は S 系から見たとき、速さ v で x 軸の正の方向に走っている。 O' は $x' = y' = z' = 0$ であらわされる。

$$ax + bt = 0, \quad y = 0, \quad z = 0 \quad (1.27)$$

つまり、

$$x = -\frac{b}{a}t \quad (1.28)$$

したがって

$$-\frac{b}{a} = v \quad (1.29)$$

つまり、

$$\tanh \theta = \frac{v}{c} \quad (1.30)$$

である。以下、

$$\beta = \frac{v}{c}$$

とおく。すると、

$$\begin{aligned} \cosh \theta &= (1 - \tanh^2 \theta)^{-1/2} = \frac{1}{\sqrt{1 - \beta^2}} \\ \sinh \theta &= \frac{\beta}{\sqrt{1 - \beta^2}} \end{aligned} \quad (1.31)$$

以上をまとめると、

$$x' = \pm \frac{x - vt}{\sqrt{1 - \beta^2}}, \quad (1.32)$$

および

$$t' = \pm \frac{t - (v/c^2)x}{\sqrt{1 - \beta^2}} \quad (1.33)$$

となる。

さらに $v \rightarrow 0$ で $x' \rightarrow x$, $t' \rightarrow t$ となるためには

$$x' = \frac{x - vt}{\sqrt{1 - \beta^2}}, \quad t' = \frac{t - (v/c^2)x}{\sqrt{1 - \beta^2}} \quad (1.34)$$

でなければならない。この関係式は、Lorentz および Poincaré²²によって、Einstein とは独立に導かれた。Einstein は2人の研究を知らずに、少しおくれて導いたのであるが、彼の元とした前提は先の2人よりずっと単純であったので、大きな意義がある。現在この変換は Lorentz 変換と呼ばれる。

なお、(1.34) を逆に解くと、

$$x = \frac{x' + vt'}{\sqrt{1 - \beta^2}}, \quad t = \frac{t' + (v/c^2)x'}{\sqrt{1 - \beta^2}} \quad (1.35)$$

となる。これは(1.34) で $v \rightarrow -v$, $(t, x, y, z) \rightarrow (t', x', y', z')$ と置き換えたものに他ならない。

1.4 特殊 Lorentz 変換からの結果

慣性系 S から慣性系 S' への(1.34) にしたがう変換は、Lorentz 変換の中でも特に簡単な場合で、特殊 Lorentz 変換と呼ばれる。そのような簡単な変換でも従来の物理概念からの変更が生じる。この節では特殊 Lorentz 変換から生じるいくつかの結果を述べる。

まず、いくつかの用語を導入する。物理現象を記述するには、その出来事が起きた時間と空間を示す必要がある。相対論では出来事を事象 (event) と呼ぶ。事象は時空内の1点で表されるが、これを世界点 (world point) と呼ぶ。事象が時間的に継続すれば、それは時空間の曲線で表されるが、それを世界線 (world line) と呼ぶ。

1.4.1 同時刻の相対性

(1.34) によれば、慣性系によって時刻は異なる。このことから、空間的に離れた2点での事象が「同時刻」ということがある慣性系で成り立っていても別の慣性系では成り立たない。

これらの関係を図で示してみよう。空間方向は x 軸のみを考え、 y, z 軸は省略する。横軸を x 軸とし、これに直角な縦軸で ct を表す (図 1.3)。 S' 系の座標軸については、 x' 軸は $t' = 0$ で表され、(1.34) から $ct = \beta x$ と

²²Jules Henri Poincaré (1854- 1912) フランスの数学者、理論物理学者

いう直線に相当する. 同様に ct' 軸は $x' = 0$ で表され、 $x = \beta ct$ となる. x' 軸の傾きは $\tan \theta = \beta$ である.

2つの事象が世界点 P, Q に起きたとする. これらを S 系から見たとき同時刻とする. S から見た P, Q の時刻と場所をそれぞれ $(t, x = a)$ および $(t, x = b)$ とする. これらを S' 系から見た場合の座標を $(t'_P, x' = a')$ および $(t'_Q, x' = b')$ とする. (1.34) を P, Q に使えば

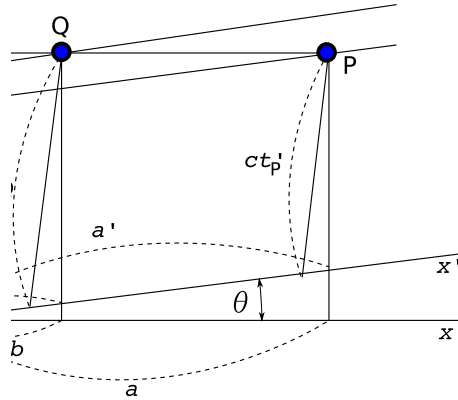


図 1.3: 同時刻の相対性: 慣性系 S から見たとき、事象 P, Q は同時刻であるが、慣性系 S' からは同時刻ではない.

$$ct'_P = \frac{ct - \beta a}{\sqrt{1 - \beta^2}}, \quad ct'_Q = \frac{ct - \beta b}{\sqrt{1 - \beta^2}}. \quad (1.36)$$

したがって

$$t'_Q - t'_P = \frac{(a - b)\beta}{c\sqrt{1 - \beta^2}} \quad (1.37)$$

$a > b$ だから、 $t'_Q > t'_P$. つまり S' 系で見れば事象 Q より事象 P の方が先に起きる.

1.4.2 Lorentz 収縮

棒が S' 系の x' 軸上に固定されているとする. その両端を図 1.4 のように A, B とする. S' 系から見た A, B の x' 座標をそれぞれ $x' = a', x' = b'$ とする. S' 系から見た棒の長さは $l_0 = a' - b'$ である. これを S 系から見ると、棒は x 軸の正の向きに速さ v で走っている. この長さを測るには、 S 系から見たある瞬間における A, B の x 座標 $x_A(t) = a, x_B(t) = b$ を求めれば良い. S 系から見た棒の長さ l は $l = a - b$ で与えられる.

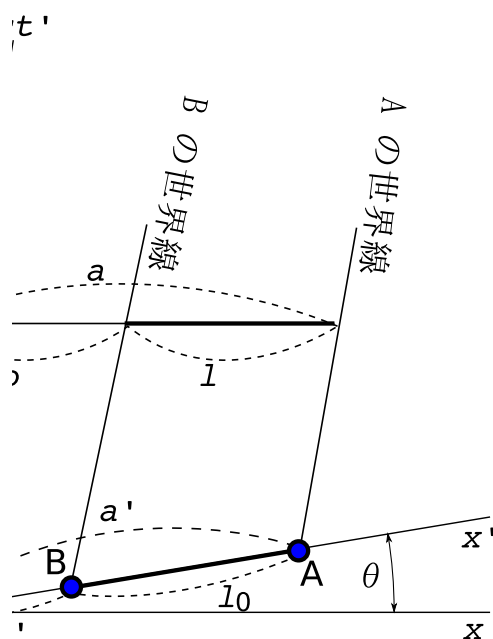


図 1.4: ローレンツ収縮: 運動している棒の長さは短く観測される.

(1.34) の第 2 式を同一時刻における A, B に使えば、

$$a' = \frac{a - vt}{\sqrt{1 - \beta^2}}, \quad b' = \frac{b - vt}{\sqrt{1 - \beta^2}} \quad (1.38)$$

したがって

$$l_0 = a' - b' = \frac{a - b}{\sqrt{1 - \beta^2}}, \quad (1.39)$$

すなわち

$$l = a - b = l_0 \sqrt{1 - \beta^2} \quad (1.40)$$

これは Lorentz 収縮にほかならない.

1.4.3 走っている時計の遅れ

2個の時計 W_1, W_2 はそれぞれ S, S' の座標原点 O, O' に固定されているとする. W_1 が時刻 t を示したとき、 W_2 の x 座標は $x = vt$ である. これを S' 系から見れば、 W_2 の座標は $(x' = 0, t')$ となる. これから t' と t の関係を求めよう. (1.34) の第1式によれば、

$$t' = \frac{t - (v/c^2)vt}{\sqrt{1 - \beta^2}} = t\sqrt{1 - \beta^2} < t \quad (1.41)$$

となる. これが有名な「走っている時計は遅れる」という現象である.

つぎに時計 W_2 が $x = f(t)$ という式にしたがって x 軸上を運動している場合を考える. Δt を十分小さくとると、 t から $t + \Delta t$ までは W_2 は速度 $v(t) = df/dt$ で等速直線運動しているとみなすことができるので、

$$\Delta t' = \Delta t \sqrt{1 - \frac{1}{c^2} \left(\frac{df}{dt} \right)^2} \quad (1.42)$$

そこで W_1 が 0 から T まで進む間に W_2 は

$$T' = \int_0^{T'} dt' = \int_0^T \sqrt{1 - \frac{1}{c^2} \left(\frac{df}{dt} \right)^2} dt \quad (1.43)$$

だけ進む. なお $f(t)$ がどのような関数でも

$$T' \leq T$$

である.

なお、上述の導出では、重力以外の外力が時計に作用して時計が加速度運動しても、加速度は時計の進みに影響を与えないと仮定している.

重力が作用する時には時計の進みに影響がでる.

1.4.4 振動数、波長の変換則

振幅が A 、振動数が ν 、波長が λ の波は

$$A \sin 2\pi \left(\frac{1}{\lambda} \vec{n} \cdot \vec{x} - \nu t + \alpha \right) \quad (1.44)$$

と表される．ここで \vec{n} は波の進行方向を表す単位ベクトル、 α は位相である．波が節となるのは慣性系 S, S' のいずれから見ても同じはずだから

$$\frac{1}{\lambda} \vec{n} \cdot \vec{x} - \nu t = \frac{1}{\lambda'} \vec{n}' \cdot \vec{x}' - \nu' t' \quad (1.45)$$

が成立する． ν', λ', \vec{n}' は S' 系から見た振動数、波長、進行方向の単位ベクトルである．波数ベクトル

$$\vec{k} = \frac{1}{\lambda} \vec{n}, \quad \vec{k}' = \frac{1}{\lambda'} \vec{n}' \quad (1.46)$$

を用いれば

$$\vec{k} \cdot \vec{x} - \nu t = \vec{k}' \cdot \vec{x}' - \nu' t' \quad (1.47)$$

となる．この左辺に (1.35) を代入して、両辺の x', t' の係数を比較すると、

$$\nu' = \frac{\nu - vk_x}{\sqrt{1 - \beta^2}}, \quad k'_x = \frac{k_x - (v/c^2)\nu}{\sqrt{1 - \beta^2}}, \quad k'_y = k_y, \quad k'_z = k_z \quad (1.48)$$

となる．

上の式を真空中を伝搬する光に当てはめる．光源は S 系の xy 面上に静止しているとする． xy 面内で x 軸と角 θ をなす方向に進む波を考える．これを S' から見たとき x' 軸となす角を θ' とする．つまり $\vec{n} = (\cos \theta, \sin \theta, 0)$ と $\vec{n}' = (\cos \theta', \sin \theta', 0)$ である．さらに光の場合には $\nu\lambda = c$ が成り立つ．したがって、

$$\nu' = \nu \frac{1 - \beta \cos \theta}{\sqrt{1 - \beta^2}}, \quad \nu' \cos \theta' = \nu \frac{\cos \theta - \beta}{\sqrt{1 - \beta^2}}, \quad \nu' \sin \theta' = \nu \sin \theta \quad (1.49)$$

となる．これらを組み合わせると

$$\tan \theta' = \frac{\sin \theta \sqrt{1 - \beta^2}}{\cos \theta - \beta} \quad (1.50)$$

あるいは

$$\tan \frac{\theta'}{2} = \tan \frac{\theta}{2} \sqrt{\frac{1 + \beta}{1 - \beta}} \quad (1.51)$$

となる．

(1.49) の最初の式はドップラー効果に相対論的修正をしたものに他ならない．ただし、古典論では光源が静止していて観測者が速度 \vec{v} で走っ

ている場合と、逆に観測者が静止していて光源が速度 $-\vec{v}$ で走る場合は振動数が異なるが、相対性理論では両者は一致する。

(1.49) で興味深いのは横ドップラー効果または二次のドップラー効果と呼ばれる現象である。S' 系から見て光の進行方向が x' 軸上に垂直な場合を考えよう。この場合 (1.49) の第2式から $\cos\theta = \beta$ となるので、これを (1.49) の第1式に代入すれば

$$\nu' = \nu\sqrt{1 - \beta^2} \quad (1.52)$$

となる。

また、(1.50) は光行差に対する相対論的公式である。

1.4.5 速度の合成則

Galilei 変換における速度の合成は単純な加算であった。しかしここでは光速以下の速度の合成であっても、合成速度が光速以上になり得る。そこで相対論的に正しい合成則を求めてみよう。

S' 系から見たとき1個の質点が

$$x' = x'(t'), \quad y' = y'(t'), \quad z' = z'(t') \quad (1.53)$$

という運動をしているとしよう。この質点を S' 系から見た速度は

$$u'_x = \frac{dx'(t')}{dt'}, \quad u'_y = \frac{dy'(t')}{dt'}, \quad u'_z = \frac{dz'(t')}{dt'} \quad (1.54)$$

$$u' = \sqrt{(u'_x)^2 + (u'_y)^2 + (u'_z)^2} \quad (1.55)$$

である。この運動を S 系から見たとき、

$$u_x = \frac{dx(t)}{dt}, \quad u_y = \frac{dy(t)}{dt}, \quad u_z = \frac{dz(t)}{dt} \quad (1.56)$$

$$u = \sqrt{(u_x)^2 + (u_y)^2 + (u_z)^2} \quad (1.57)$$

とする。両者の関係を調べよう。(1.35) を使うと

$$dx = \frac{dx' + vdt'}{\sqrt{1 - \beta^2}}, \quad dy = dy', \quad dz = dz', \quad dt = \frac{dt' + (v/c^2)dx'}{\sqrt{1 - \beta^2}} \quad (1.58)$$

が成り立つ. そこで上の第 1,2,3 の式を第 4 式で割れば

$$u_x = \frac{u'_x + v}{1 + (u'_x v/c^2)}, \quad u_y = \frac{u'_y \sqrt{1 - \beta^2}}{1 + (u'_x v/c^2)}, \quad u_z = \frac{u'_z \sqrt{1 - \beta^2}}{1 + (u'_x v/c^2)} \quad (1.59)$$

となる. また u は

$$\begin{aligned} u^2 &= u_x^2 + u_y^2 + u_z^2 \\ &= \frac{(u'_x + v)^2 + (u_y'^2 + u_z'^2)(1 - v^2/c^2)}{(1 + (u'_x v/c^2))^2} \\ &= \frac{c^2(1 + (u'_x v/c^2))^2 - c^2(1 - u'^2/c^2)(1 - v^2/c^2)}{(1 + (u'_x v/c^2))^2} \end{aligned} \quad (1.60)$$

となる. これより

$$1 - \frac{u^2}{c^2} = \frac{(1 - u'^2/c^2)(1 - v^2/c^2)}{(1 + (u'_x v/c^2))^2} \quad (1.61)$$

これから明らかなように $|u'| < c$, $|v| < c$ ならば合成された速さ u も $|u| < c$ である. したがって光速以下の速度を加えても、必ず合成速度は光速以下になる. もし、 $|u'|$, $|v|$ のどちらかが c に等しければ $|u| = c$ となることもわかる.

1.5 実験的検証

- Kennedy-Thorndyke

Michelson-Morley の実験結果は、Fitzgerald-Lorentz の収縮仮説のみで説明できる.

そこで、単色光源を使い、干渉計の 2 つの腕の長さが異なる実験装置を使うと、Lorentz 収縮による効果と、時間の遅れを分離して検証できる.

R.J. Kennedy and E.M. Thorndike, Experimental Establishment of the Relativity of Time Phys. Rev. 42 400-418 (1932)

特殊相対性理論から予想される結果と 2 % 以内で一致した.

- 2 次のドップラー効果は運動する原子のスペクトルから確認された.
H.E. Ives and G.R. Stilwell, An Experimental Study of the Rate of a Moving Atomic Clock J. Opt. Soc. Am. 28 215-226 (1938)

- レーザーを使った Michelson-Morley タイプの実験が行われ、エーテル仮説の理論値の 400 万分の 1 以下の実験値がえられている (Brillet-Hall experiment)
- 2 次のドップラー効果については、2 光子吸収を用いた実験で 100 万分の 1 以下の精度で検証されている。

第2章 テンソル算

2.1 一般の Lorentz 変換

任意のひとつの事象 (ひとつの世界点) P を慣性系 S から見た時刻と場所を示す直交座標を (t, x, y, z) とする。今後便利のために $x^0 = ct$, $x^1 = x$, $x^2 = y$, $x^3 = z$ で定義された4つの数 x^μ ($\mu = 0, 1, 2, 3$) をもって世界点の座標を表すことにする。 (x^0, x^1, x^2, x^3) を世界点 P の4次元座標とよぶ。同じ世界点 P を他の慣性系 S' から見た場合の座標を (x'^0, x'^1, x'^2, x'^3) とする。

ところで相対性原理によれば、 S 系から見て質点が等速直線運動しているならば、 S' 系でも等速直線運動になってなければならない。このことから x'^μ と x^μ の関係は1次式でなければならない。

$$x'^\mu = \sum_{\nu=0}^3 a^\mu{}_\nu x^\nu + b^\mu \quad (\mu = 0, 1, 2, 3) \quad (2.1)$$

ここで、 $a^\mu{}_\nu$ は x^μ に無関係な16個の係数、 b^μ は S' 系から見たときの S 系の原点の座標を表す。ここで、次のような便法を採用する。数式の中の同じ項の中に同一の添字が上下の位置2箇所に表れたときにはその添字について0から3まで和をとるものと約束する (Einstein の規約)。たとえば、(2.1) は

$$x'^\mu = a^\mu{}_\nu x^\nu + b^\mu$$

とあらわされる。特に S 系と S' 系の原点が一致するように選ぶと $b^\mu = 0$ となるので、

$$x'^\mu = a^\mu{}_\nu x^\nu \quad (2.2)$$

である。

関係式 (2.1) に、光速度不変の原理にもとづく条件

$$-(x^0)^2 + \sum_{k=1}^3 (x^k)^2 = -(x'^0)^2 + \sum_{k=1}^3 (x'^k)^2 \quad (2.3)$$

を付け加える．ここで、

$$\eta_{\mu\nu} = \eta_{\nu\mu} = \begin{cases} 0 & (\mu \neq \nu) \\ -1 & (\mu = \nu = 0) \\ 1 & (\mu = \nu = 1, 2, 3) \end{cases} \quad (2.4)$$

と言う記号を導入しよう．これを使うと条件 (2.3) は

$$\eta_{\mu\nu} x^\mu x^\nu = \eta_{\mu\nu} x'^\mu x'^\nu \quad (2.5)$$

という形になる．

(2.5) に (2.2) を代入して x の係数を比較すると、

$$\eta_{\mu\nu} = \eta_{\rho\sigma} a_\mu^\rho a_\nu^\sigma \quad (2.6)$$

となる。

(2.2) で定義された座標変換 $x^\mu \rightarrow x'^\mu$ で、かつその係数 a_ν^μ が条件式 (2.6) を満たすとき、それは Lorentz 変換である．(2.2) のかわりに (2.1) についてその係数が (2.6) を満たすとき、非斉次 Lorentz 変換とよぶ。

条件 (2.6) は添字 μ, ν について対称なので、10 個の条件式となる．係数 a_ν^μ は 16 個の成分があるが、(2.6) の 10 個の条件式より、独立なパラメーターは $16 - 10 = 6$ 個である．これは、回転の自由度 3 つと、慣性系同士の相対速度ベクトルの自由度 3 つの和に当たる．

Lorentz 変換全体は数学でいう群をなす．単位元に相当するものは a_ν^μ を

$$\delta_\nu^\mu = \begin{cases} 1 & (\mu = \nu) \\ 0 & (\mu \neq \nu) \end{cases} \quad (2.7)$$

とおいた恒等変換

$$x'^\mu = x^\mu$$

である．

Lorentz 変換の逆変換もまた Lorentz 変換である．

$$x^\nu = b_\mu^\nu x'^\mu \quad (2.8)$$

逆変換の係数 b_μ^ν と、元の Lorentz 変換の係数 a_ν^μ の関係を求めてみよう．

まず a^μ_ν を行列要素とする 4×4 行列 \mathbf{A} を考えよう. つまり

$$(\mathbf{A})_{\mu\nu} \equiv a^\mu_\nu \quad (2.9)$$

と定義する. 同様に行列 \mathbf{Y} を

$$(\mathbf{Y})_{\mu\nu} \equiv \eta_{\mu\nu} \quad (2.10)$$

で定義する. \mathbf{A} の転置行列 \mathbf{A}^T は

$$(\mathbf{A}^T)_{\mu\nu} \equiv (\mathbf{A})_{\nu\mu} = a^\nu_\mu \quad (2.11)$$

である. すると, (2.6) は

$$(\mathbf{Y})_{\mu\nu} = (\mathbf{A}^T \mathbf{Y} \mathbf{A})_{\mu\nu} \quad (2.12)$$

となる. 両辺の行列式をとると

$$\det(\mathbf{Y}) = \det(\mathbf{A}^T \mathbf{Y} \mathbf{A}) = \det(\mathbf{A}^T) \det(\mathbf{Y}) \det(\mathbf{A}) \quad (2.13)$$

ここで

$$\det(\mathbf{A}^T) = \det(\mathbf{A}), \quad \det(\mathbf{Y}) = -1 \quad (2.14)$$

を使うと

$$\det(\mathbf{A}) = \pm 1 \quad (2.15)$$

となる. したがって \mathbf{A} の逆行列は存在する.

ここで新しい記号 $\eta^{\mu\nu}$ を導入しよう.

$$\eta^{\mu\nu} \equiv \begin{cases} 0 & (\mu \neq \nu) \\ -1 & (\mu = \nu = 0) \\ 1 & (\mu = \nu = 1, 2, 3) \end{cases} \quad (2.16)$$

これを用いると, 行列 \mathbf{Y} の逆行列 \mathbf{Y}^{-1} は

$$(\mathbf{Y}^{-1})_{\mu\nu} \equiv \eta^{\mu\nu} \quad (2.17)$$

と表される. これを使うと (2.12) から

$$\mathbf{1} = \mathbf{Y}^{-1} \mathbf{A}^T \mathbf{Y} \mathbf{A} \quad (2.18)$$

が導かれる。これを元の記号で書くと

$$\delta_{\nu}^{\mu} = \eta^{\mu\lambda} a_{\lambda}^{\rho} \eta_{\rho\sigma} a_{\nu}^{\sigma} \quad (2.19)$$

一方、

$$\delta_{\nu}^{\mu} = b_{\sigma}^{\mu} a_{\nu}^{\sigma} \quad (2.20)$$

2つの式を比較して、

$$b_{\sigma}^{\mu} = \eta^{\mu\lambda} a_{\lambda}^{\rho} \eta_{\rho\sigma} \quad (2.21)$$

が得られた。今後、簡単のために右边を

$$\eta^{\mu\lambda} a_{\lambda}^{\rho} \eta_{\rho\sigma} \equiv a_{\sigma}^{\mu} \quad (2.22)$$

と記すことにする。

最後に(2.6)から導かれるもう一つの間係を調べよう。(2.6)で $\mu = \nu = 0$ とおけば、

$$-1 = -(a_0^0)^2 + \sum_{k=1}^3 (a_0^k)^2 \quad (2.23)$$

すなわち、

$$a_0^0 = \pm \sqrt{1 + \sum_{k=1}^3 (a_0^k)^2} \quad (2.24)$$

となる。したがって $a_0^0 \geq 1$ か $a_0^0 \leq -1$ である。つまり Lorentz 変換は $\det(\mathbf{A}) = \pm 1$ および $a_0^0 \geq 1$ か $a_0^0 \leq -1$ によって4個の組に分類される。特に $\det(\mathbf{A}) = 1$ で $a_0^0 \geq 1$ の変換を本義 Lorentz 変換 (proper Lorentz transformation) という。本義 Lorentz 変換に空間反転、時間反転を組み合わせると、一般の Lorentz 変換となる。

2.2 スカラー、ベクトル、テンソル

慣性座標系 S および S' からみた同一世界点 P の4次元座標をそれぞれ x^{μ} , x'^{μ} とする。これらの間には

$$x'^{\mu} = a_{\nu}^{\mu} x^{\nu} + b^{\mu} \quad (2.25)$$

と言う関係が成り立ち、その係数は非斉次 Lorentz 変換であるための条件式

$$\eta_{\mu\nu} = \eta_{\rho\sigma} a_{\mu}^{\rho} a_{\nu}^{\sigma} \quad (2.26)$$

を満足しているものとする。

2.2.1 スカラー

ある物理量の S 系ならびに S' 系を基準とした場合の値をそれぞれ C, C' とするとき、常に

$$C = C' \quad (2.27)$$

が成り立つ場合に、 C をスカラー (scalar) とよぶ。また、4 次元時空内のある領域で、物理量が分布していて、S 系、S' 系での値を、それぞれ $\Theta(x) \equiv \Theta(x^0, x^1, x^2, x^3)$ および $\Theta(x') \equiv \Theta(x'^0, x'^1, x'^2, x'^3)$ という関数で表そう。この領域内の全ての点で

$$\Theta(x) = \Theta'(x') \quad (2.28)$$

が成立するとき $\Theta(x)$ をスカラー場と呼ぶ (x と x' は同じ世界点を S, S' から見た座標である)。

2.2.2 反変ベクトル

4 個の成分を持つ物理量の S 系、S' 系を基準とした場合のそれぞれの成分を A^μ, A'^μ とする。これらに間に

$$A'^\mu = \frac{\partial x'^\mu}{\partial x^\nu} A^\nu = a^\mu_\nu A^\nu \quad (2.29)$$

という関係が成立するとき、これを反変ベクトル (contravariant vector) とよぶ。2 つの世界点 P, Q の座標差 $\Delta x^\mu = x^\mu_Q - x^\mu_P$ は反変ベクトルの一例である。

A^μ がある領域に分布していて、世界点の座標 x の関数で、これを S 系、S' 系から見たとき、それぞれ $A^\mu(x), A'^\mu(x')$ とする。さらにこれらが

$$A'^\mu(x') = \frac{\partial x'^\mu}{\partial x^\nu} A^\nu(x) \quad (2.30)$$

を満たす場合、 $A^\mu(x)$ を反変ベクトル場という。

2.2.3 共変ベクトル

ベクトルには別の種類のものがある。4 個の成分を持つ物理量の S 系、S' 系を基準とした場合のそれぞれの成分を B_μ, B'_μ とする。これらに間に

$$B'_\mu = \frac{\partial x^\nu}{\partial x'^\mu} B_\nu \quad (2.31)$$

という関係が成立するとき、これを共変ベクトル (covariant vector) とよぶ。

スカラー場 $\Theta(x)$ を微分した量

$$\Theta_{\mu}(x) \equiv \frac{\partial \Theta(x)}{\partial x^{\mu}} \quad (2.32)$$

は共変ベクトル場の一例である。

2.2.4 テンソル

ベクトルの概念を拡張したテンソルを説明しよう。例として2個の反変ベクトル場 $A^{\mu}(x), B^{\nu}(x)$ をとる。これらの成分の積

$$C^{\mu\nu}(x) \equiv A^{\mu}(x)B^{\nu}(x) \quad (2.33)$$

をつくる。 $C'^{\mu\nu}(x')$ と $C^{\mu\nu}(x)$ の間には

$$\begin{aligned} C'^{\mu\nu}(x') &\equiv A'^{\mu}(x')B'^{\nu}(x') = \frac{\partial x'^{\mu}}{\partial x^{\rho}} \frac{\partial x'^{\nu}}{\partial x^{\sigma}} A^{\rho}(x)B^{\sigma}(x) \\ &= \frac{\partial x'^{\mu}}{\partial x^{\rho}} \frac{\partial x'^{\nu}}{\partial x^{\sigma}} C^{\rho\sigma}(x) \end{aligned} \quad (2.34)$$

という関係が導かれる。一般に

$$C'^{\mu\nu}(x') = \frac{\partial x'^{\mu}}{\partial x^{\rho}} \frac{\partial x'^{\nu}}{\partial x^{\sigma}} C^{\rho\sigma}(x) \quad (2.35)$$

という変換則が成り立つとき C を2階反変テンソル場 (contravariant tensor field of the 2nd rank) という。

一般のテンソルの定義は以下ようになる。ある量 $T(x)$ の S 系、 S' 系からみた成分をそれぞれ

$$T^{\alpha\beta\cdots\gamma}_{\delta\epsilon\cdots\zeta}(x), \text{ および } T'^{\lambda\mu\cdots\nu}_{\rho\sigma\cdots\tau}(x') \quad (2.36)$$

とする。これらが

$$T'^{\lambda\mu\cdots\nu}_{\rho\sigma\cdots\tau}(x') = \frac{\partial x'^{\lambda}}{\partial x^{\alpha}} \frac{\partial x'^{\mu}}{\partial x^{\beta}} \cdots \frac{\partial x'^{\nu}}{\partial x^{\gamma}} \frac{\partial x^{\delta}}{\partial x'^{\rho}} \frac{\partial x^{\epsilon}}{\partial x'^{\sigma}} \cdots \frac{\partial x^{\zeta}}{\partial x'^{\tau}} T^{\alpha\beta\cdots\gamma}_{\delta\epsilon\cdots\zeta}(x), \quad (2.37)$$

という関係で結ばれるとき $T(x)$ をテンソル場 (tensor field) とよぶ。この例で、上付き添字 ($\lambda\mu\cdots\nu$) が r 個、下付き添字 ($\rho\sigma\cdots\tau$) が s 個とする

とき、 T は r 階反変、 s 階共変の混合テンソル (mixed tensor) とよばれる。上付き添字だけのときは r 階反変テンソル (contravariant tensor of rank r)、下付き添字だけのときは s 階共変テンソル (covariant tensor of rank s) と呼ばれる。

テンソルの添字に対する注意を述べよう。例えば 2 階共変テンソル $F_{\mu\nu}$ の成分について、添字を入れ替えても値が変わらないとき、つまり

$$F_{\mu\nu} = F_{\nu\mu} \quad (2.38)$$

という性質を持つとき、 F を対称共変テンソルという。また、添字を入れ替えて符号だけが変わる時、つまり

$$F_{\mu\nu} = -F_{\nu\mu} \quad (2.39)$$

という性質を持つとき、 F を反対称共変テンソルという。

高階のテンソルでも、1 対の添字の組の入れ替えについて、同様にして対称、反対称が定義される。高階テンソルであらゆる添字の入れ替えについて対称なテンソルを完全対称テンソル、高階テンソルであらゆる添字の入れ替えについて反対称なテンソルを完全反対称テンソルという。

テンソルの例

Kronecker の記号 δ^μ_ν は混合テンソルである。

$$\delta^\mu_\nu = \frac{\partial x'^\mu}{\partial x^\alpha} \frac{\partial x^\beta}{\partial x'^\nu} \delta^\alpha_\beta \quad (2.40)$$

$\eta^{\mu\nu}$ は 2 階の反変テンソルである。

$$\eta'^{\mu\nu} = \frac{\partial x'^\mu}{\partial x^\alpha} \frac{\partial x'^\nu}{\partial x^\beta} \eta^{\alpha\beta} \quad (2.41)$$

2.3 テンソルの演算

2.3.1 和

2 つの同じ種類のテンソル $A^{\mu\nu}{}_\lambda$, $B^{\mu\nu}{}_\lambda$ の和を

$$C^{\mu\nu}{}_\lambda = A^{\mu\nu}{}_\lambda + B^{\mu\nu}{}_\lambda \quad (2.42)$$

とおくと、 $C^{\mu\nu}{}_\lambda$ は $A^{\mu\nu}{}_\lambda$, $B^{\mu\nu}{}_\lambda$ と同じタイプのテンソル場である。

2.3.2 スカラーとの積

スカラーとテンソルの積は同じタイプのテンソルである。たとえば、スカラー S とテンソル $A^{\mu\nu}{}_{\lambda}$ の積

$$SA^{\mu\nu}{}_{\lambda} \quad (2.43)$$

は元のテンソルと同じタイプのテンソルである。

2.3.3 テンソル積

異なるタイプのテンソルの積を考えよう。例えば $A^{\mu\nu}{}_{\lambda}$ と $B_{\alpha\beta}$ から

$$C^{\mu\nu}{}_{\lambda\alpha\beta} \equiv A^{\mu\nu}{}_{\lambda} B_{\alpha\beta} \quad (2.44)$$

のような5階の混合テンソルを作ることができる。 C を A, B のテンソル積という。

2.3.4 テンソルの微分

テンソル場の微分もテンソルになる。例えば

$$\frac{\partial A^{\mu\nu}{}_{\lambda}(x)}{\partial x^{\rho}} \quad (2.45)$$

は4階混合テンソルである。これは、形式的に共変ベクトル $\partial_{\rho} \equiv \partial/\partial x^{\rho}$ と $A^{\mu\nu}{}_{\lambda}(x)$ とのテンソル積とみなすことができる。

2.3.5 縮約

高階の混合テンソル $A^{\alpha\beta\cdots\gamma}{}_{\delta\epsilon\cdots\zeta}$ において、反変および共変成分の任意の1対を同じ添字とし、その添字について0,1,2,3と和をとり、2階分低い階のテンソルを作ること縮約 (contraction) という。たとえば

$$B^{\beta\cdots\gamma}{}_{\delta\cdots\zeta} = A^{\alpha\beta\cdots\gamma}{}_{\delta\alpha\cdots\zeta} \quad (2.46)$$

である。

2.3.6 内積

テンソル積と縮約を組み合わせると、内積が定義できる．例として、2個のテンソル $A^{\mu\nu}$, $B_{\alpha\beta}$ のテンソル積

$$C^{\mu\nu}{}_{\lambda\alpha\beta} \equiv A^{\mu\nu}{}_{\lambda} B_{\alpha\beta} \quad (2.47)$$

をもとめ、次にこれに縮約をして

$$C^{\mu}{}_{\lambda\alpha} \equiv C^{\mu\beta}{}_{\lambda\alpha\beta} = A^{\mu\beta}{}_{\lambda} B_{\alpha\beta} \quad (2.48)$$

あるいは

$$D^{\nu}{}_{\lambda\alpha} = A^{\beta\nu}{}_{\lambda} B_{\alpha\beta}, \quad E^{\nu}{}_{\lambda\beta} = A^{\alpha\nu}{}_{\lambda} B_{\alpha\beta}$$

のような種々の3階のテンソルを求める操作をテンソル A, B の内積という．

反変ベクトル A と共変ベクトル B よりスカラー

$$C = A^{\mu} B_{\mu} \quad (2.49)$$

が定義できるが、 C をベクトル A, B のスカラー積という．

2.3.7 テンソルのタイプの変換

ところで $\eta_{\mu\nu}$ を使うとテンソルの添字を自由に上下できる．たとえば、反変ベクトル A^{μ} と $\eta_{\mu\nu}$ の内積をとると

$$B_{\nu} \equiv \eta_{\mu\nu} A^{\mu}$$

という共変ベクトルができる．逆に B_{ν} と $\eta^{\mu\nu}$ の内積から、

$$\eta^{\mu\nu} B_{\nu} = \eta^{\mu\nu} \eta_{\nu\lambda} A^{\lambda} = \delta^{\mu}_{\lambda} A^{\lambda} = A^{\mu}$$

のように元の A^{μ} が導かれる．このようにして得られた B_{ν} は元の A^{μ} とは表現が違うだけなので、今後の便利のため

$$A_{\mu} \equiv \eta_{\mu\nu} A^{\nu} \quad (2.50)$$

のようにあらわすことにする．テンソルについても同様に扱う．

$$T_{\mu\nu} = \eta_{\mu\alpha} \eta_{\nu\beta} T^{\alpha\beta} \quad (2.51)$$

2.3.8 ベクトルの分類

ベクトル A^μ の自分自身とのスカラー積

$$(A)^2 \equiv A_\mu A^\mu = \eta_{\mu\nu} A^\mu A^\nu = -(A^0)^2 + \sum_{k=1}^3 (A^k)^2 \quad (2.52)$$

を A の大きさの二乗という。これは正の値をとるとは限らない。 A^μ の空間成分の方が時間成分の値より大きくて

$$(A)^2 > 0$$

となるとき A^μ を空間的ベクトル (space-like vector)、逆に

$$(A)^2 < 0$$

となるとき A^μ を時間的ベクトル (time-like vector)、どちらでもないとき、つまり

$$(A)^2 = 0$$

をゼロベクトル (null vector) という。 $(A)^2$ はスカラーで Lorentz 変換してもその値は不変だから、 A がこれら3種類のベクトルのいずれかであるかという性質は座標系の取り方によらない、絶対的な性質である。

2.3.9 光円錐

図 2.1 で世界点 P と原点 O とを結ぶベクトルを考え、その成分を x^μ とする。 x^μ が空間的ベクトルならば点 P は円錐面

$$-(x^0)^2 + \sum_{k=1}^3 (x^k)^2 = 0 \quad (2.53)$$

の外側にある。空間的ベクトルで表わされる点の集合、つまり円錐面の外の領域を空間的 (space-like) 領域という。この領域の事象は原点での事象と因果関係を持つことが出来ない。

これに対し世界点 Q と O を結ぶベクトル y^μ が時間的ベクトルならば点 Q は円錐面の内部にある。このような領域を時間的 (time-like) 領域という。この領域の事象は原点での事象と因果関係を持つことが出来る。時間的領域はさらに O での事象に影響を与えうる過去の領域と、 O での事象から影響を受ける未来の領域に分けられる。

最後に世界点 R と O を結ぶベクトル z^μ がゼロベクトルならば点 R は円錐面上にある。これを光円錐 (light-cone) と呼ぶ。

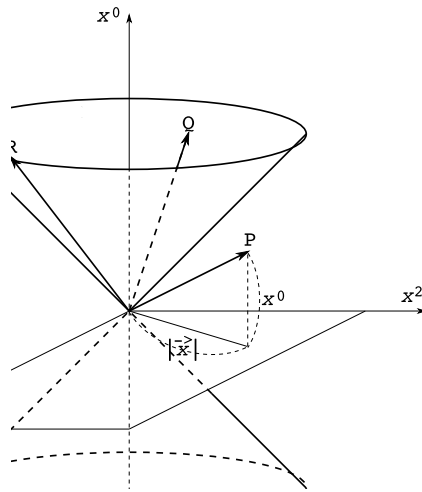


図 2.1:

2.3.10 ダランベール演算子

ベクトルのスカラー積として特に重要なものに

$$\square \equiv \eta^{\mu\nu} \frac{\partial}{\partial x^\mu} \frac{\partial}{\partial x^\nu} = -\frac{1}{c^2} \frac{\partial^2}{\partial t^2} + \frac{\partial^2}{\partial x^2} + \frac{\partial^2}{\partial y^2} + \frac{\partial^2}{\partial z^2} \quad (2.54)$$

という演算子(ダランベール演算子、ダランベールシアン(D'Alembertian)がある。

後で見るように電磁波がどの慣性系から見ても一定の早さ c で伝搬するのはこの関係式に由来する。

第3章 相対論的力学

3.1 相対論的運動学

Newton 力学は Galilei 変換にたいして不変であるが、Lorentz 変換に対しては不変ではない。そこで Newton 力学を少し修正して Lorentz 変換にたいして不変になるようにしよう。

Newton の力学では質点の運動は、質点の空間座標 $x^k (k = 1, 2, 3)$ を時間 t の関数で書き下すことにより表現される。しかしこの表現法は時間と空間を同格に扱っていないので、相対論に馴染まない。できれば Lorentz 変換にたいして不変なパラメーター λ を適当に見つけて、質点の 4 元座標 $x^\mu (\mu = 0, 1, 2, 3)$ を λ の関数として表現したい。この様なパラメーターとして最適なものは質点の描く世界線の 4 次元的道のりである。質点が、世界点 x^μ から $x^\mu + \Delta x^\mu$ (Δx^μ は微小量) まで移動した場合、両点のあいだの 4 次元的不変距離 (の 2 乗) は

$$\Delta s^2 = \eta_{\mu\nu} \Delta x^\mu \Delta x^\nu = -c^2(\Delta t)^2 + (\Delta \vec{x})^2$$

であたえられる。これは $(\Delta \lambda)^2$ の候補である。しかし質点の 3 次元的速度 $\vec{v} = \Delta \vec{x} / \Delta t$ の大きさは常に光速 c より小さいために、反変ベクトル Δx^μ は必ず時間的ベクトルになり、したがって Δs^2 は必ず負となる。

そこで、混乱を避けるために $\Delta s^2 = -c^2(\Delta \tau)^2$ と書き直す。つまり Lorentz 変換にたいして不変な実数のパラメーター τ の (微小な) 増加量 $\Delta \tau$ は

$$-c^2(\Delta \tau)^2 \equiv \eta_{\mu\nu} \Delta x^\mu \Delta x^\nu \quad (3.1)$$

であたえられる。今後このように定義された τ を前述の λ として用い、質点の 4 次元的位置を $x^\mu(\tau)$ であらわすことにする。なお、(3.1) 式は次のような形にも表される。

$$\Delta \tau = \Delta t \sqrt{1 - \left(\frac{\vec{v}}{c}\right)^2} \quad (3.2)$$

$\vec{v} = d\vec{x}/dt$ は質点の3次元的速度である。

τ はこの質点の固有時間 (proper-time) とよばれる。このことを説明しよう。ある瞬間にこの質点と同じ速度で走っている慣性座標系 S' 系からこの質点を眺めたとしよう。質点の座標を $x'^{\mu}(\tau)$ とすれば、質点は瞬間 τ には静止して見えるから $x'^k(\tau) = x'^k(\tau + \Delta\tau)$ ($k = 1, 2, 3$)、また $x'^0(\tau + \Delta\tau) - x'^0(\tau) = \Delta x'^0 = c\Delta t'$ となる。したがって、

$$-c^2(\Delta\tau)^2 = \eta_{\mu\nu}\Delta x'^{\mu}\Delta x'^{\nu} = -c^2(\Delta t')^2.$$

つまり $\Delta\tau = \Delta t'$ で、質点と一緒に運動している時計の t' は τ と同じように進んでいることを意味する。

τ は Lorentz 不変なスカラーであるから、質点の位置 $x^{\mu}(\tau)$ の変化率

$$u^{\mu} \equiv \frac{dx^{\mu}}{d\tau} \quad (3.3)$$

は x^{μ} と同じ変換性を持ち、したがって反変ベクトルである。これを質点の4元速度 (four-velocity) という。

4元速度と静止系への Lorentz 変換の間には以下の関係が成り立つ。ある瞬間に質点と同じ早さではしる慣性座標系 S' をとり、 S' 系の原点と質点を一致させる。この S' からみた質点の座標を $x'^{\mu}(\tau) = (x'^0, \vec{x}' = 0)$ とし、他の慣性座標系 S からみた質点の座標を $x^{\mu}(\tau)$ とする。これらは Lorentz 変換

$$x'^{\mu} = a^{\mu}_{\nu}x^{\nu}, \text{ あるいは } x^{\nu} = b^{\nu}_{\mu}x'^{\mu} = b^{\nu}_0x'^0 \quad (3.4)$$

で結ばれているとする。2番目の式を固有時間 τ で微分すると、

$$u^{\nu} = b^{\nu}_0c\frac{dt'}{d\tau} = cb^{\nu}_0 \quad (3.5)$$

となる。

4元速度 u^{μ} と3次元速度 \vec{v} との関係は (3.2) を使って次のようになる。

$$u^k = \frac{v^k}{\sqrt{1-\beta^2}}, \quad u^0 = \frac{c}{\sqrt{1-\beta^2}}. \quad (3.6)$$

ここで $k = 1, 2, 3$, $\beta = |\vec{v}|/c$ である。これを使うと恒等式

$$\eta_{\mu\nu}u^{\mu}u^{\nu} = -c^2 \quad (3.7)$$

を示すことが出来る。これは、(3.1) を $(\Delta\tau)^2$ で割って導くことも出来る。

4元加速度は

$$a^\mu \equiv \frac{du^\mu}{d\tau} = \frac{d^2x^\mu}{d\tau^2} \quad (3.8)$$

によって定義される．これも反変ベクトルである．ところで恒等式 (3.7) のためにベクトル a^μ と u^μ は「直交」する．すなわち

$$\eta_{\mu\nu}u^\mu a^\nu = 0 \quad (3.9)$$

となる。

3.2 力学の基礎方程式の相対論的修正

Lorentz 変換の公式は S と S' の相対速度が c に比べて十分小さくなる と Galilei 変換の公式に近づく．したがって、質点の速さが c に比べ十分小さい場合は修正後の力学方程式は Newton の法則に十分近いと考えられる．

そこで次のような要請を前提とする．ある瞬間に質点と同じ運動をする慣性座標系 S' をとったとする．つまりこの瞬間は S' では質点は静止して見える．この様な静止系では、質点に対する Newton の運動方程式

$$m \frac{d^2x'^k}{dt'^2} = F'^k, \quad \frac{dx'^k}{dt'} = 0 \quad (k = 1, 2, 3) \quad (3.10)$$

がその瞬間だけ成り立つとする．ここで m は質点の質量、 F'^k は S' 系から見た外力の第 k 成分である．これにさらに

$$m \frac{d^2x'^0}{dt'^2} = F'^0 \quad (3.11)$$

を追加する．左辺は $d^2(ct')/dt'^2 = 0$ であるので、 $F'^0 = 0$ である．これらをまとめると、

$$m \frac{d^2x'^\mu}{dt'^2} = F'^\mu, \quad (\mu = 0, 1, 2, 3) \quad (3.12)$$

となる．この左辺には t' が含まれているのでその Lorentz 変換は複雑である．ところで S' 系がこの瞬間だけ質点の静止系なので、 t' を質点の固有時間 τ に置き換えることができる．つまり

$$m \frac{d^2x'^\mu}{d\tau^2} = F'^\mu, \quad (3.13)$$

この左辺は反変ベクトルである．したがって力学の法則が Lorentz 変換にたいして不変であるためには右辺の F^μ も反変ベクトルでなければならない．実はこれは大事な仮定である．以前 Newton の運動方程式 (1.5) がガリレイ変換に対して不変であることを示す際に、外力はどの慣性系でも同じことを前提にしていたが、相対論ではこれが成り立たず、外力は Lorentz 変換を受けることになるからである．

S' 系から S 系への Lorentz 変換を (3.13) に行うと、一般の慣性系 S から見た力学の方程式は

$$m \frac{d^2 x^\mu}{d\tau^2} = F^\mu \quad (3.14)$$

とまとめられる．次に F^μ を静止系 S' の F'^i であらわしてみよう．変換 $S' \rightarrow S$ を

$$x^\nu = b^\nu_\mu x'^\mu$$

とすれば

$$F^\mu = b^\mu_\nu F'^\nu = \sum_{k=1}^3 b^\mu_k F'^k \quad (3.15)$$

となる．

相対論的な力 F^μ は4個の成分を持つ反変ベクトルである．これを4元力 (four-force) という．実は4元力の各成分は独立ではなく、次の関係が成り立っている．

$$u_\mu F^\mu = 0 \quad (3.16)$$

実際 (3.14) の両辺に u_μ をかけて縮約すると

$$m u_\mu a^\mu = u_\mu F^\mu$$

左辺は (3.9) により恒等的に 0 なので、(3.16) が成立する．

3.3 エネルギーおよび運動量

相対論的運動方程式 (3.14) を次のように書換える．

$$\frac{d}{d\tau} p^\mu = F^\mu \quad (3.17)$$

ここで p^μ は4元運動量 (four-momentum) とよばれ、その定義は

$$p^\mu \equiv m u^\mu = m \frac{dx^\mu}{d\tau} \quad (3.18)$$

である。定義から容易に p^μ は反変ベクトルであることがわかる。自由粒子、つまり外力がない場合 ($F^\mu = 0$) では

$$\frac{d}{d\tau} p^\mu = 0 \quad (3.19)$$

で、 p^μ は一定だが、これは運動量およびエネルギー保存則に対応する。

3.3.1 静止エネルギー

ここで p^0 の意味を考えるために、次のような考察をする。

$$\vec{p} = (p^1, p^2, p^3)$$

とおくと、(3.2) を使って

$$\frac{d\vec{p}}{dt} = \vec{F} \sqrt{1 - \left(\frac{\vec{v}}{c}\right)^2}$$

ここで

$$\vec{K} \equiv \vec{F} \sqrt{1 - \left(\frac{\vec{v}}{c}\right)^2} \quad (3.20)$$

は Newton 力学の意味での力と考えられる。したがって、(3.17) の空間成分は

$$\frac{d\vec{p}}{dt} = \vec{K} \quad (3.21)$$

と表される。

次に (3.17) の時間成分について考察してみよう。まず恒等式 (3.16) は (3.6) を用いて

$$cF_0 \sqrt{1 - \left(\frac{v}{c}\right)^2} = (\vec{v} \cdot \vec{K}) \quad (3.22)$$

と表すことが出来る。したがって (3.17) の時間成分は、

$$\frac{d}{dt}(cp^0) = cF^0 \sqrt{1 - \left(\frac{\vec{v}}{c}\right)^2} = (\vec{K} \cdot \vec{v}) \quad (3.23)$$

となる。この右辺は単位時間中に外力が質点に与える仕事である。したがって

$$cp^0 = \text{質点の持つエネルギー} + \text{定数}$$

と解釈される。通常、エネルギーを定義する場合、その原点をどこにおくかには任意性があった。しかし Einstein は上記の定数を 0 とおいた。その結果、エネルギーと運動量を一組として、4次元ベクトル p^μ にまとめられることになった。Einstein によるこの定義の妥当性は、のちに実験により確認された。

以上まとめると

$$\begin{cases} \vec{p} &= \frac{m\vec{v}}{\sqrt{1-(\vec{v}/c)^2}} = \text{質点の運動量} \\ cp^0 &= \frac{mc^2}{\sqrt{1-(\vec{v}/c)^2}} = W = \text{質点のエネルギー} \end{cases} \quad (3.24)$$

となる。

前述の式で特に速度 $\vec{v} = 0$ の場合、運動量 $\vec{p} = 0$ だが、エネルギー W は mc^2 となる。これを質量 m の質点の静止エネルギー (rest energy) という。

3.3.2 4元運動量と質量

恒等式

$$u_\mu u^\mu = -c^2 \quad (3.25)$$

から

$$p_\mu p^\mu = -(mc)^2 \quad (3.26)$$

が成り立つ。これは質量の定義式とみなせる。未知の粒子の質量を求めるのに使うことができる。

これからエネルギー W と運動量 \vec{p} の間の関係が導かれる。

$$W = c\sqrt{(\vec{p})^2 + (mc)^2} \quad (3.27)$$

特に質点の速さが光速より十分小さい場合 $|\vec{v}| \ll c$ では

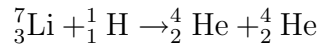
$$W = mc^2 + \frac{1}{2m}(\vec{p})^2 + \dots$$

となる。右辺第1項は静止エネルギー、第2項は Newton の運動エネルギーにあたる。

3.3.3 実験事実

Cockroft-Walton の実験 (1932)

Cockroft¹と Walton²は直流高電圧加速器で陽子を加速してリチウムの原子に当てたところ、2個の α 粒子(ヘリウム原子核)が飛び出す反応



がおこった。

α 粒子の運動エネルギーはほぼ 8.6MeV であった。

質量減少

$$\Delta M = 7.014368 + 1.007277 - 2 \times 4.001506 = 0.018633(\text{原子質量単位})$$

これにたいして

$$\Delta Mc^2 = 0.018633 \times 931.48 = 17.3(\text{MeV})$$

ところで

$$2 \times 8.6 = 17.2(\text{MeV})$$

両者は互いに良く一致しており、Einstein の関係式を実験的に支持している。

電子対の生成消滅

電子の質量は $9.1093826 \times 10^{-31}\text{kg}$ で、エネルギーに換算すると 511 keV である。陽電子(ポジトロン positron)は電子と同じ質量で反対の電荷を持つ反粒子である(理論は Dirac³(1928)、実験は Anderson⁴(1932))

陽電子は電子は対消滅して2個の γ 線を出す。

¹John Douglas Cockroft (1897-1967) イギリスの物理学者。1951年ノーベル物理学賞。

²Ernest Walton (1903-1995) アイルランドの物理学者。1951年ノーベル物理学賞。

³Paul Adrien Maurice Dirac (1902-1984) イギリスの理論物理学者。1933年ノーベル物理学賞。

⁴Carl David Anderson (1905-1991) アメリカの物理学者。1936年ノーベル物理学賞受賞。

第4章 相対論的電磁気学

電磁場の Maxwell の方程式は特別な解釈なしに、そのまま相対性理論の枠組で書き直すことができる。

4.1 真空中の Maxwell の方程式

この節ではまず真空中の Maxwell の方程式を復習してみよう。これは真空中に点電荷がいくつかある場合の電磁気学にあたる。電荷密度を ρ 、電流密度を \vec{j} とすると Maxwell の方程式はつぎのようにあらわされる。

$$\nabla \cdot \vec{B} = 0 \quad (4.1)$$

$$\frac{\partial \vec{B}}{\partial t} + \nabla \times \vec{E} = 0 \quad (4.2)$$

$$\nabla \cdot \vec{D} = \rho \quad (4.3)$$

$$\nabla \times \vec{H} - \frac{\partial \vec{D}}{\partial t} = \vec{j} \quad (4.4)$$

ここで $\vec{D}, \vec{E}, \vec{B}, \vec{H}$ はそれぞれ電束密度、電場の強さ、磁束密度、磁場の強さを表す。真空中では

$$\vec{D} = \epsilon_0 \vec{E}, \quad \vec{B} = \mu_0 \vec{H} \quad (4.5)$$

という関係がある。 ϵ_0, μ_0 はそれぞれ真空の誘電率、および透磁率である。両者の間には次の関係がある。

$$\epsilon_0 \mu_0 = \frac{1}{c^2}$$

c は真空中の光速度である。

4.1.1 ポテンシャルと波動方程式

式 (4.1),(4.2) から \vec{B}, \vec{E} はポテンシャル \vec{A}, ϕ を使って次の形に表される .

$$\vec{B} = \nabla \times \vec{A}, \quad \vec{E} = -\frac{\partial \vec{A}}{\partial t} - \nabla \phi \quad (4.6)$$

ここで、ベクトル解析の公式

$$\nabla \cdot (\nabla \times \vec{V}) = 0 \quad (\vec{V} \text{ は任意の 3 次元ベクトル場})$$

および

$$\nabla \times (\nabla f) = 0 \quad (f \text{ は任意のスカラー場})$$

を使った .

(4.6) を Maxwell の方程式 (4.3),(4.4) に代入し、ベクトル解析の公式

$$\nabla \times \nabla \times \vec{V} = \nabla(\nabla \cdot \vec{V}) - \nabla^2 \vec{V}$$

を使うと、

$$\square \phi = -\frac{\rho}{\epsilon_0} \quad (4.7)$$

$$\square \vec{A} = -\mu_0 \vec{j} \quad (4.8)$$

(ここで \square は (2.54) で定義した微分演算子) となる。ただし条件

$$\nabla \cdot \vec{A} + \frac{1}{c^2} \frac{\partial \phi}{\partial t} = 0 \quad (4.9)$$

が必要である .

4.1.2 Lorentz 条件

ここで、方程式 (4.7),(4.8) の解で、さらに (4.9) という条件を満たすものが存在し得るか否か、つまり (4.7),(4.8) と条件 (4.9) が両立可能か、確認してみよう . まず (4.7),(4.8) から

$$\square \left(\nabla \cdot \vec{A} + \frac{1}{c^2} \frac{\partial \phi}{\partial t} \right) = -\mu_0 \left(\nabla \cdot \vec{j} + \frac{\partial \rho}{\partial t} \right) \quad (4.10)$$

となる。この右辺は元の Maxwell 方程式から導かれるように

$$\nabla \cdot \vec{j} + \frac{\partial \rho}{\partial t} = 0 \quad (4.11)$$

となる。したがって

$$\square \left(\nabla \cdot \vec{A} + \frac{1}{c^2} \frac{\partial \phi}{\partial t} \right) = 0 \quad (4.12)$$

つまり、(4.7),(4.8) と (4.9) は両立する。なお (4.11) は電荷の保存則を示す方程式である。条件 (4.9) は Lorentz 条件と呼ばれる。Lorentz 条件は以下で述べるポテンシャルの不定性 (ゲージ変換) に制限を付ける。

4.1.3 ゲージ変換

実は、物理的に観測可能な電磁場 \vec{B}, \vec{E} がわかっているにもかかわらず、関係式 (4.6) から、ポテンシャル \vec{A}, ϕ は一意に決まるわけではない。これを示すため、一組の \vec{A}, ϕ から

$$\vec{A}' = \vec{A} + \nabla \lambda, \quad \phi' = \phi - \frac{\partial \lambda}{\partial t} \quad (4.13)$$

という別の一組 \vec{A}', ϕ' を作ってみる。ここで $\lambda(\vec{x}, t)$ は (\vec{x}, t) の任意の関数でかまわない。この \vec{A}', ϕ' を (4.6) に代入してみると

$$\begin{aligned} \nabla \times \vec{A}' &= \nabla \times \vec{A} = \vec{B}, \\ -\frac{\partial \vec{A}'}{\partial t} - \nabla \phi' &= -\frac{\partial \vec{A}}{\partial t} - \nabla \phi = \vec{E} \end{aligned} \quad (4.14)$$

となる。つまり与えられた \vec{B}, \vec{E} を作り出すポテンシャルは \vec{A}, ϕ に限らない。任意の λ を用いて作った別の \vec{A}', ϕ' も同じ \vec{B}, \vec{E} を再現する。 \vec{A}, ϕ のかわりに \vec{A}', ϕ' に移ることをゲージ変換 (gauge transformation) という。観測可能な量 \vec{B}, \vec{E} はゲージ変換をしても、その値が不変である。

4.1.4 ゲージ変換と Lorentz 条件

ゲージ変換の不定性を利用すると、ある \vec{A}, ϕ が Lorentz 条件を満たさなくても λ をうまく選べば \vec{A}', ϕ' が Lorentz 条件を満たすようにできる。つまり

$$0 = \nabla \cdot \vec{A}' + \frac{1}{c^2} \frac{\partial \phi'}{\partial t} = \square \lambda + \nabla \cdot \vec{A} + \frac{1}{c^2} \frac{\partial \phi}{\partial t} \quad (4.15)$$

が成立するような λ を使ってゲージ変換すれば Lorentz 条件が満たされる。

4.2 Maxwell の方程式の相対論的書き替え

前節で求めたいろいろな式をテンソルで書きかえ、相対性原理を満たしていることを確認しよう。

4.2.1 電荷保存則

まず電流の連続方程式 (4.11) から始める。

$$j^1 = j_x, j^2 = j_y, j^3 = j_z, j^0 = c\rho \quad (4.16)$$

とすると、(4.11) はある慣性系 S において

$$\partial_\mu j^\mu(x) = 0 \quad (4.17)$$

となる (ここで $\partial_\mu \equiv \partial/\partial x^\mu$)。次に j^μ が反変ベクトルかどうか、確認しよう。ところで (実験事実から) 電荷の保存則は、どの慣性系でも成立する。つまり他の慣性系 S' において、 $j'^\mu(x')$ を同じように定義すると

$$\partial'_\mu j'^\mu(x') = 0 \quad (4.18)$$

が成り立つ。したがってこれらの式はスカラー量である。一方 ∂_μ は共変ベクトルであるので、相対性原理が成立するためには j^μ は反変ベクトルでなくてはならない。この様な j^μ を 4 元電流 (four-current) という。

4.2.2 ポテンシャル

次にポテンシャルについて考察する。

$$A^0 = \frac{1}{c}\phi, A^1 = A_x, A^2 = A_y, A^3 = A_z, \quad (4.19)$$

とおくと、(4.7),(4.8) は

$$\square A^\lambda = -\mu_0 j^\lambda \quad (4.20)$$

となる。ここで右辺は反変ベクトルである。また \square は (2.54) で定義した、Lorentz 変換しても不変な微分演算子である。したがって A^λ は反変ベクトルでなくてはならない。

Lorentz 条件 (4.9) はスカラーの形になり、

$$\partial_\lambda A^\lambda = 0 \quad (4.21)$$

となる。

ゲージ変換もテンソル形式に表現できる．まず $A_\mu = \eta_{\mu\nu} A^\nu$ を導入する．これを使うとゲージ変換は

$$A_\mu \rightarrow \bar{A}_\mu + \partial_\mu \lambda \quad (4.22)$$

と表すことができる．ここで λ は $\square\lambda = 0$ を満たす 4 次元スカラー場である．ゲージ変換後の \bar{A}_μ も元の A_μ と同様に共変ベクトルである．なお A^μ, A_μ をいずれも 4 元ポテンシャル (four-potential) という。

4.2.3 電磁場 \vec{B}, \vec{E}

さて \vec{B}, \vec{E} をテンソル形式に表そう．ここで反対称 2 階共変テンソル $f_{\mu\nu}$ を

$$f_{\mu\nu} \equiv \partial_\mu A_\nu - \partial_\nu A_\mu = -f_{\nu\mu} \quad (4.23)$$

で定義する．すると $f_{\mu\nu}$ と \vec{B}, \vec{E} の間には

$$\begin{pmatrix} f_{00} & f_{01} & f_{02} & f_{03} \\ f_{10} & f_{11} & f_{12} & f_{13} \\ f_{20} & f_{21} & f_{22} & f_{23} \\ f_{30} & f_{31} & f_{32} & f_{33} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 & -\frac{1}{c}E_x & -\frac{1}{c}E_y & -\frac{1}{c}E_z \\ \frac{1}{c}E_x & 0 & B_z & -B_y \\ \frac{1}{c}E_y & -B_z & 0 & B_x \\ \frac{1}{c}E_z & B_y & -B_x & 0 \end{pmatrix} \quad (4.24)$$

という等式が成り立つ．

なおゲージ変換で $f_{\mu\nu}$ の値は不変である．

$$f_{\mu\nu} \rightarrow \bar{f}_{\mu\nu} = \partial_\mu \bar{A}_\nu - \partial_\nu \bar{A}_\mu = f_{\mu\nu} \quad (4.25)$$

ついでに $f^{\mu\nu}$ を \vec{B}, \vec{E} であらわすと

$$\begin{pmatrix} f^{00} & f^{01} & f^{02} & f^{03} \\ f^{10} & f^{11} & f^{12} & f^{13} \\ f^{20} & f^{21} & f^{22} & f^{23} \\ f^{30} & f^{31} & f^{32} & f^{33} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 & \frac{1}{c}E_x & \frac{1}{c}E_y & \frac{1}{c}E_z \\ -\frac{1}{c}E_x & 0 & B_z & -B_y \\ -\frac{1}{c}E_y & -B_z & 0 & B_x \\ -\frac{1}{c}E_z & B_y & -B_x & 0 \end{pmatrix} \quad (4.26)$$

4.2.4 まとめ

結局 Maxwell の方程式は (4.20) となり、これに Lorentz 条件 (4.21) が付け加わる。

4.3 Maxwell の方程式の相対論的書き替え (II)

前節では 4 元ポテンシャルを使って電磁場の方程式を相対論的に書き換えた。ここではポテンシャルを使わないで Maxwell 方程式の相対論的書き換えを試みよう。まず反対称テンソル $f_{\mu\nu} = -f_{\nu\mu}$ を (4.24) で直接 \vec{B}, \vec{E} を使い定義する。他に 4 元電流を (4.16) で定義する。

すると Maxwell の方程式のうち (4.3), (4.4) は

$$\partial_\nu f^{\lambda\nu} = \mu_0 j^\lambda \quad (4.27)$$

となる。またのこりの (4.1) (4.2) は

$$\partial_\lambda f_{\mu\nu} + \partial_\mu f_{\nu\lambda} + \partial_\nu f_{\lambda\mu} = 0 \quad (4.28)$$

となる。

式 (4.28) は一見 $64 = 4 \times 4 \times 4$ 個の方程式のように見える。しかしこれらの大部分は恒等式で、独立な方程式は以下で示すように 4 個のみである。今 (4.28) の左辺を

$$F_{\lambda\mu\nu} \equiv \partial_\lambda f_{\mu\nu} + \partial_\mu f_{\nu\lambda} + \partial_\nu f_{\lambda\mu} \quad (4.29)$$

とおくと、 $f_{\mu\nu}$ が反対称テンソルであることを使うと $F_{\lambda\mu\nu}$ は完全反対称の 3 階共変テンソルであることが示せる。したがって λ, μ, ν の添字のうちどれか 2 個の添字が一致すれば $F = 0$ となる。また、 λ, μ, ν の順序だけが異なるものは、符号をのぞけば、値が等しい。まとめると $F_{\lambda\mu\nu}$ のうち独立なものは $F_{123}, F_{012}, F_{023}, F_{031}$ の 4 個である。例えば $F_{123} = 0$ を具体的に書けば

$$0 = F_{123} = \partial_1 f_{23} + \partial_2 f_{31} + \partial_3 f_{12} = \nabla \cdot \vec{B} \quad (4.30)$$

これは Maxwell の方程式の (4.1) である。残りの式も同様にしてでる。

4.3.1 電磁場のエネルギー運動量テンソル

電磁場のエネルギー運動量テンソルについて述べよう。(4.27) の両辺に $f_{\lambda\rho}$ をかけると左辺 (LHS) は

$$LHS = f_{\lambda\rho} \partial_\nu f^{\lambda\nu} = \partial_\nu (f_{\lambda\rho} f^{\lambda\nu}) - f^{\lambda\nu} \partial_\nu f_{\lambda\rho} \quad (4.31)$$

第2項は $f^{\lambda\nu} = -f^{\nu\lambda}$ ということをつかうと

$$\begin{aligned} -f^{\lambda\nu} \partial_\nu f_{\lambda\rho} &= -\frac{1}{2} f^{\lambda\nu} (\partial_\nu f_{\lambda\rho} - \partial_\lambda f_{\nu\rho}) \\ &= -\frac{1}{2} f^{\lambda\nu} (\partial_\nu f_{\lambda\rho} + \partial_\lambda f_{\rho\nu} + \partial_\rho f_{\nu\lambda}) + \frac{1}{2} f^{\lambda\nu} \partial_\rho f_{\nu\lambda} \end{aligned} \quad (4.32)$$

さらに関係式 (4.28) をつかうと、

$$-f^{\lambda\nu} \partial_\nu f_{\lambda\rho} = -\frac{1}{4} \partial_\rho (f^{\lambda\nu} f_{\lambda\nu}) \quad (4.33)$$

この式の添字を変えると、

$$LHS = \partial_\nu \left(f^{\lambda\nu} f_{\lambda\rho} - \frac{1}{4} \delta_\rho^\nu f^{\alpha\beta} f_{\alpha\beta} \right) \quad (4.34)$$

結局

$$\partial_\nu \left(f^{\lambda\nu} f_{\lambda\rho} - \frac{1}{4} \delta_\rho^\nu f^{\alpha\beta} f_{\alpha\beta} \right) = \mu_0 j^\lambda f_{\lambda\rho} \quad (4.35)$$

ここで、

$$T_\rho^\nu \equiv -\frac{1}{\mu_0} \left(f^{\lambda\nu} f_{\lambda\rho} - \frac{1}{4} \delta_\rho^\nu f^{\alpha\beta} f_{\alpha\beta} \right) \quad (4.36)$$

とすると、

$$\partial_\nu T_\rho^\nu = f_{\rho\lambda} j^\lambda \quad (4.37)$$

となる。

さらに

$$T^{\nu\mu} = \eta^{\rho\mu} T_\rho^\nu = -\frac{1}{\mu_0} \left(\eta_{\lambda\sigma} f^{\lambda\nu} f^{\sigma\mu} - \frac{1}{4} \eta^{\nu\mu} f^{\alpha\beta} f_{\alpha\beta} \right) = T^{\mu\nu} \quad (4.38)$$

と書き直し、 $T^{\nu\mu}$ の各成分を \vec{B} , \vec{E} で表すと

$$\begin{pmatrix} T^{00} & T^{01} & T^{02} & T^{03} \\ T^{10} & T^{11} & T^{12} & T^{13} \\ T^{20} & T^{21} & T^{22} & T^{23} \\ T^{30} & T^{31} & T^{32} & T^{33} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -w & -cg_x & -cg_y & -cg_z \\ -\frac{1}{c}S_x & M_{xx} & M_{xy} & M_{xz} \\ -\frac{1}{c}S_y & M_{yx} & M_{yy} & M_{yz} \\ -\frac{1}{c}S_z & M_{zx} & M_{zy} & M_{zz} \end{pmatrix} \quad (4.39)$$

ここで、

$$\begin{aligned} w &= \frac{1}{2}(\vec{D} \cdot \vec{E} + \vec{B} \cdot \vec{H}) = \text{電磁場のエネルギー密度} \\ \vec{g} &= \frac{1}{c^2}(\vec{E} \times \vec{H}) = \text{電磁場の運動量密度} \\ \vec{S} &= (\vec{E} \times \vec{H}) = \text{電磁場のエネルギーの流れの密度} \end{aligned} \quad (4.40)$$

なお、 \vec{S} は Poynting vector ともよばれる。また、 M は Maxwell の応力テンソルと呼ばれるもので、

$$M_{ik} = \epsilon_0 E_i E_k + \mu_0 H_i H_k - \frac{1}{2} \delta_{ik} (\vec{D} \cdot \vec{E} + \vec{B} \cdot \vec{H}) \quad (4.41)$$

である。 $T^{\mu\nu}$ を電磁場のエネルギー-運動量テンソル (energy momentum tensor) という。

4.3.2 電磁場のエネルギー、運動量保存則

(4.37) は (4.39) を使って書き直すと

$$-\frac{\partial w}{\partial t} = \nabla \cdot \vec{S} + (\vec{E} \cdot \vec{j}) \quad (4.42)$$

$$\frac{\partial g_k}{\partial t} = \sum_{l=1}^3 \partial_l M_{lk} - (\rho \vec{E} + \vec{j} \times \vec{B})_k \quad (k = 1, 2, 3) \quad (4.43)$$

となる。ある時刻 t で3次元空間の領域 V で積分し、Gauss の定理を使うと、

$$-\frac{\partial}{\partial t} \int_V w d^3x = \int_F \vec{S} \cdot d\vec{\sigma} + \int_V (\vec{E} \cdot \vec{j}) d^3x \quad (4.44)$$

$$\frac{\partial}{\partial t} \int_V g_k d^3x = \sum_{l=1}^3 \int_F M_{lk} d\sigma_l - \int_V (\rho \vec{E} + \vec{j} \times \vec{B})_k d^3x \quad (k = 1, 2, 3) \quad (4.45)$$

ここで領域 V の表面を F 、 F 上の面積素片を $d\sigma$ 、その点での外向きの単位法線ベクトルを \vec{n} 、 $d\vec{\sigma} \equiv \vec{n}d\sigma$ とした。(4.44) の右辺第1項は表面 F から単位時間中に逃げ出すエネルギー量、第2項は単位時間中に V の中にある電荷に電場が与える仕事を示す。したがって左辺は V の中の電磁場のエネルギーの減少量を表す。同様に (4.45) の右辺第2項は単位時間

中に V の中にある電荷、電流に電磁場が与える力の反作用、つまり電磁場が電荷から受ける力を示し、右辺第 1 項は表面 F を通して V の外側にある電磁場が V に与える電磁的張力を示す。したがって左辺は V の中の電磁場の運動量の時間的増加率を表す。

もし $\rho = 0, \vec{j} = 0$ で、かつ遠方で電磁場が十分早く 0 になる場合は $V \rightarrow \infty$ で表面積分の寄与はなくなる。したがって

$$P_0 \equiv \int_{-\infty}^{\infty} T_{00} d^3x = - \int_{-\infty}^{\infty} w d^3x \quad (4.46)$$

$$P_k \equiv \int_{-\infty}^{\infty} T_{0k} d^3x = c \int_{-\infty}^{\infty} g_k d^3x \quad (k = 1, 2, 3) \quad (4.47)$$

はいずれも時間変化しない。これは電磁場のエネルギー、運動量の保存則をあらわす。またこのように定義した P_μ は 4 次元共変ベクトルである。

さらに荷電粒子の運動 ($\rho \neq 0, \vec{j} \neq 0$) を考える際に、荷電粒子だけではエネルギー、運動量の保存則はなりたたず、上記のように定義した電磁場のエネルギー、運動量 P_μ と合計した全体でエネルギー、運動量の保存則が成立する。この事実は、(遠隔作用にたいして) 近接作用論を強く支持し、電磁場を物理的実体とみなす根拠となる。

第II部
量子力学

第5章 導入

原子論はギリシアの昔からあったが、長い間仮説に留まっていた。19世紀末に、陰極線、X線、放射能などの発見があり、直接原子のかかわる現象が物理の対象になり始めた。

間接的ではあるが、19世紀後半に多数の粒子の集団を統計的に扱う統計力学が発展し、ミクロ(微視的)な粒子からマクロ(巨視的)な現象を理論的に記述できるようになり、マクロな現象を系統的に理解できるようになった。

しかし、研究が進むにつれ、古典力学と電磁気学では説明できない現象が見付かってきた。これらの問題を解決するのに誕生したのが量子力学である。

今や量子力学は、素粒子論や物性論など物理学を支える土台となり、また化学での分子構造、反応性など理論的に裏付ける量子化学となり、さらに半導体、超伝導、レーザー、MRIや原子時計などいたるところに応用されるようになってきている。

5.1 歴史的序論

量子力学は、次のような実験事実を説明するために建設された。

5.1.1 波動(電磁波)の粒子性

黒体放射

プランク(Planck¹)による黒体放射の分析(1900)から、

$$E = nh\nu \quad (5.1)$$

¹Karl Ernst Ludwig Marx Planck (1858-1947) ドイツの物理学者、1918年ノーベル物理学賞

(E はエネルギー、 ν は振動数、 n は0 又は正の整数、 h はプランク定数)、つまり電磁場のエネルギーの量子化(光子)が起こることが示された。ここで h は作用の次元 ($[\text{質量}] \times [\text{長さ}]^2 \times [\text{時間}]^{-1} = [\text{エネルギー}] \times [\text{時間}] = [\text{長さ}] \times [\text{運動量}]$) をもち、

$$h = 6.626068 \times 10^{-34} J \cdot s \quad (5.2)$$

である。

黒体：外部から入射する電磁波(光、赤外線、紫外線、マイクロ波など)を、全波長にわたって完全に吸収し、または放出できる物体。

空洞放射と等価である。

熱力学によると、黒体から放射される電磁波の振動数と強度の関係は温度のみによってきまる。

1. Stefan-Boltzmann の法則

実験 J. Stefan (1879)

理論 L. Boltzmann² (1884)

黒体の表面から、単位面積、単位時間あたりに放出される電磁波のエネルギーが温度の4乗に比例するという法則

$$j = \sigma T^4 \quad (5.3)$$

ここで σ は Stefan-Boltzmann 定数

$$5.670400 \times 10^{-8} W m^{-2} K^{-4}$$

である。

2. Wien の変位則 (1893)

W. Wien³ が熱力学的関係式より導いた。

黒体放射スペクトルが最大となる波長 λ_{max} は

$$\lambda_{max} = \frac{b}{T} \quad (5.4)$$

となる。

²Ludwig Boltzmann (1844-1906) オーストリアの物理学者

³Wilhelm Wien (1864-1928) ドイツの物理学者、1911年ノーベル物理学賞

3. Wien の公式 (1896)

Wien はさらに粒子的な扱いと 断熱不変量 (後で説明する) を統計力学に扱って

$$U(\nu)d\nu = \frac{8\pi k_B \beta}{c^3} \exp(-\beta\nu/T) \nu^3 d\nu \quad (5.5)$$

を導いた。ここで k_B は Boltzmann 定数

$$k_B = 1.3806505 \times 10^{-23} J/K$$

で、定数 β は実験と合うように決める。

短波長では黒体放射をうまく説明するが、長波長側では実験とあわない。

また、理論的に見ても電磁気学とは整合性が取れていない。

4. Rayleigh-Jeans の公式 (1900,1905)

Rayleigh⁴ は統計力学のエネルギー等分配則を電磁場に応用して

$$U(\nu)d\nu = \frac{8\pi k_B T}{c^3} \nu^2 d\nu \quad (5.6)$$

という公式を得た。

長波長では黒体放射をうまく説明するが、短波長側では発散がおき、実験とあわない。

電磁波の波動的な性質はきちんと取り入れている。

5. Planck の公式

Planck は Wien の公式と Rayleigh-Jeans の公式の補間式をさがし、

$$U(\nu)d\nu = \frac{8\pi h}{c^3} \frac{1}{\exp(h\nu/k_B T) - 1} \nu^3 d\nu \quad (5.7)$$

と言う形を見出した (1900 年)。

これは全波長で黒体放射を定量的にうまく説明する。

また電磁気学とも矛盾しない。

⁴John William Strutt Rayleigh (1842-1919) イギリスの物理学者、1904 年ノーベル物理学賞

6. 電磁気と熱力学的考察

Planck は Planck の公式にたどり着く前に電磁気と熱力学を組み合わせて (ただし、等分配則ではなく、後で述べる断熱不変量を基本にして、)

$$U(\nu)d\nu = \frac{8\pi}{c^3} F\left(\frac{\nu}{T}\right) \nu^3 d\nu \quad (5.8)$$

という公式を古典的に導いていた。ただし、 F の関数形は古典的には決まらない。

Wien の公式は

$$F(x) = k_B \beta \exp(-\beta x)$$

にあたり、Planck の公式は

$$F(x) = \frac{k_B \beta}{\exp(\beta x) - 1}$$

で、 $h = k_B \beta$ としたものにあたる。

7. Planck は Planck の公式の発見後、その意味を徹底的に考え、全ての物体が連続でなく原子の集合から成り立っているのと同様に、(電磁場の) エネルギーも連続量ではなくある単位量の自然数倍になっているのではないかと言う結論にたどり着いた。このエネルギーの素量を彼はエネルギー量子と名付けた。

8. Rayleigh-Jeans の公式は波動的な立場とエネルギー等分配則にもとづき、Wien の公式は粒子的な立場と断熱不変量に基づく。

Planck の公式は波動と粒子の2重性を反映したもので、かつ断熱不変量に基づく。これはまさに量子力学の本質をついた洞察である。

光電効果

光電効果からも電磁波のエネルギーの量子化 (Einstein, 1905) がでてくる。

$$E = \frac{1}{2}mv^2 = h\nu - W \quad (5.9)$$

光電効果: 可視光や紫外線を金属などに当てると表面から電子が飛び出す現象。

1. Hertz (1887)

電磁波の実験中に発見した。紫外線により放電が起こりやすくなる。

2. Hallwachs (1888)

Hallwachs⁵ は光電効果で出てくるものが負の電荷であることを確認した。負に帯電させた亜鉛の金属板に紫外線を当てると電荷が急速に失われるが、正に帯電させたものでは電荷がなかなか失われないことから推論した。

3. J.J.Thomson⁶ (1899)

光電効果で出てくる粒子の比電荷 (e/m) を測定、電子であることを確認した。

4. Lenard の実験 (1902)

Lenard⁷ は明るい炭素アーク灯を用い、色を変えての光電効果の実験をした。

- (a) 飛び出す電子 1 個あたりのエネルギーは、光の強度にはよらない。
- (b) 光の強度を大きくすると、単位時間に飛び出る電子の個数が多くなる。
- (c) 飛び出す電子 1 個あたりの運動エネルギーは、光の波長に関係し、波長が短い程 (振動数が高いほど) エネルギーの高い電子が飛び出す。

ただ、光源の単色性が不十分なことと、真空中の金属表面が若干酸化されているため (当時の真空技術の限界)、実験結果の再現性および定量性は不十分だった。

5. Einstein の理論 (1905)

6. Millikan の実験 (1916)

⁵Wilhelm Ludwig Franz Hallwachs (1859-1922) ドイツの物理学者。

⁶Joseph John Thomson (1856-1940) イギリスの物理学者。1906 年ノーベル賞受賞

⁷Philipp Eduard Anton von Lénárd (1862-1947) ハンガリーの物理学者、1905 年ノーベル物理学賞

Millikan⁸ は水銀の複数のスペクトル線を用いて単色性のよい光源を使い、真空中の金属表面を清浄に保つための工夫をして光電効果の実験を行った。

元々の動機は Einstein の光量子仮説を否定するつもりだったが、逆に Einstein の理論を、実験で定量的に示した。彼の実験から (5.9) を使って求められた h は、黒体放射からの Planck 定数 h と良く一致した。

コンプトン効果

運動量についても、Einstein は

$$p = h/\lambda \quad (5.10)$$

(p は運動量、 λ は波長) と、電磁場が粒子のようにふるまうと予想し、Compton⁹ は X 線と電子の散乱による散乱 X 線の波長が伸びるコンプトン (Compton) 効果 (1923) により実証した。

電磁場の粒子としての側面を光量子、または光子と呼ぼう。最近では、CCD などを使った実験でも電磁波の粒子性が見られる。

反跳電子

Wilson, Bothe

5.1.2 固体比熱

1. Dulong¹⁰ -Petit¹¹ の法則 (1819)

固体元素の定積モル比熱が常温ではほぼ一定。

$$C_V = 3R \quad (5.11)$$

エネルギー等分配則より。

低温ではこれからずれ、0 に向かう。

⁸Robert Andrews Millikan (1868-1953) アメリカの物理学者、1923 年ノーベル物理学賞

⁹Arthur Holly Compton (1892-1962) アメリカの物理学者、1927 年ノーベル賞受賞

¹⁰Pierre Louis Dulong (1785-1838) フランスの科学者 (物理、化学)

¹¹Alexis Thérèse Petit (1791-1820) フランスの物理学者

2. Einstein モデル (1907)

固体振動を独立に同一の振動数で単振動する調和振動子で表したものの、古典論ではDulong-Petitの法則のままだが、量子効果を取入れ、振動の量子化をすると低温での比熱の現象が定性的に説明できる。

3. Debye¹²モデル (1912)

Einstein モデルの改良、定量的にも良くあう。

5.1.3 原子のスペクトル

気体放電管などから、原子から出てくる光を分光器などで見ると特徴的なスペクトルを示す。

水素原子のスペクトル

水素原子は1個の陽子の回りを1個の電子が回っていて、もっとも簡単な構造を持つ。対応して、水素原子の出す光のスペクトルも単純な構造を持つ。

水素原子の出す光のスペクトル線は複数あり、一連の系列をなす。

最初に見付かった水素原子の光のスペクトル線の関係はBalmer¹³により発見された(1885)。彼は可視部の4本のスペクトル線の波長が

$$\frac{9}{5}h, \frac{16}{12}h, \frac{25}{21}h, \frac{36}{32}h, \quad h = 3.6456 \times 10^{-7}m$$

と表されることを発見し、

$$\lambda = \frac{n^2}{n^2 - 4}h \quad n = 3, 4, 5, 6, \quad (5.12)$$

という公式にまとめられることに気づいた。

Rydberg¹⁴はアルカリ金属原子のスペクトルの研究から、スペクトル線の系列について

$$\frac{1}{\lambda} = \frac{1}{\lambda_{\infty}} - \frac{R}{(n+b)^2} \quad n: \text{正の整数} \quad (5.13)$$

¹²Peter Joseph William Debye (1884-1966) オランダの物理学者、物理化学者、1936年ノーベル化学賞

¹³Johann Jakob Balmer (1825-1898) スイスの科学者(物理学、数学)

¹⁴Johannes Robert Rydberg (1854-1919) スウェーデンの物理学者

と整理した (1888)。ここで、 λ_∞ は系列端の波長である。Rydberg の公式中の R (Rydberg 定数) は原子の種類によらず、

$$R = 1.09737 \times 10^7 m^{-1}$$

であり、Balmer の定数との関係は $R = 4/h$ である。これにたいし、 b は原子の種類ごとにことなり、また系列ごとに異なる値をとるが、一つ系列内ではほぼ同じ値をとる。

Rydberg はさらに研究を進め、いろいろなスペクトル系列の系列端の規則性を見出した。つまり

$$\frac{1}{\lambda} = R \left(\frac{1}{(m+b)^2} - \frac{1}{(n+b)^2} \right) \quad n, m: \text{正の整数} \quad (5.14)$$

となる。これを Rydberg の公式 (1890) という。

水素原子の場合は Rydberg の公式で $a = b = 0$ にあたり、

$$\frac{1}{\lambda} = R \left(\frac{1}{m^2} - \frac{1}{n^2} \right) \quad (5.15)$$

とまとめられ、Balmer 系列は $m = 2$ の場合にあたる。

その後、水素原子のスペクトルをもっと広い範囲で調べると紫外線では $m = 1$ に属する Lyman¹⁵ 系列 (1906)、赤外線では $m = 3$ に属する Paschen 系列 (1908), C. H. F. Paschen) $m = 4$ に属する Blackett 系列 (1922) が見付かった。

5.1.4 粒子 (電子) の波動性

逆に電子は波動としても振舞う。ド・ブロイ (de Broglie) 波 (1923) と、デヴィッソン・ガーマー (Davisson, Germer) の実験 (Ni 単結晶表面の回折) (1927)、菊池の実験 (雲母による回折) (1928)。これらから、運動量 p の電子は、

$$k (= \frac{2\pi}{\lambda}) = \frac{p}{\hbar} \quad (5.16)$$

という波数 k (もしくは波長 λ) の波として振舞う。最近では電子線ホログラフィー (外村)。

このことは、水素原子のスペクトル構造とも関係する。

¹⁵Theodore Lyman (1874-1954) アメリカの物理学者

中性子回折の実験でも粒子の波動性が示されている。特に、中性子線回折計 (Bonse, 1974) で、粒子の波動性のみならず、スピンの回転対称性、スピノール、量子力学と (一般相対性理論の) 等価原理などが調べられている。

5.1.5 角運動量の量子化

軌道角運動量の量子化に関してはゼーマン (Zeeman) 効果 (1896)(原子のスペクトルの磁場中での分裂)、

スピン角運動量の量子化に関してはシュテルン・ゲルラッハ (Stern, Gerlach) の実験 (1922)。

5.2 応用、発展

1. 素粒子物理学への場の量子論。
2. 素励起: 物性物理での様々な素励起 (フォノン、マグノン、ホール、プラズモン、エキシトン など) による多彩な現象の説明。半導体などへの応用。
3. コヒーレント状態: 量子論はミクロな現象ばかりでなく、マクロにも観測される。例として、超伝導やレーザーでは巨視的に位相の揃ったコヒーレント状態が現れる。
4. NMR, MRI: 角運動量の量子化を利用した計測法。

と言ったものがある。

第6章 前期量子論

6.1 原子の構造

6.1.1 アボガドロ数

Loschmidt¹は粘性係数の測定から気体分子の平均自由行程を求め、同じ物質の液体と気体の密度の比較から分子の体積を求めた(1865)。これによりアボガドロ数が求められる。

ブラウン運動からアボガドロ数を測定することもできる。これは Einstein が理論的に予想し(1905)、実験は Perrin²が行った(1908)。

アボガドロ数から原子の質量がわかる。

6.1.2 電子

陰極線：陰極線管などの放電現象に見られる電子の流れ。

J. J. Thomson は陰極線の磁場と電場による偏向を調べ、比電荷 e/m を測定(1897)した。

Millikan と Fletcher³は油滴実験で素電荷 e を測定(1909-1913)した。

6.1.3 陽子

Goldstein⁴は放電管の陽極から出るカナル線を発見(1886)、後に陽子と特定されるものを含んでいるが、種々の正電荷のイオンから構成されていた。J. J. Thomson の電子の比電荷の測定後、Goldstein は原子が中性

¹Johann Josef Loschmidt (1821-1895) オーストリアの科学者(化学、物理学、結晶学)

²Jean Baptiste Perrin (1870-1942) フランスの物理学者、科学者。ノーベル物理学賞(1926)

³Harvey Fletcher (1884-1981) アメリカの物理学者

⁴Eugen Goldstein (1850-1930) ドイツの物理学者

であるので電子は正電荷のもの(陽子に対応)と結び付いてなければならぬと議論したが、彼の実験から比電荷を求めるとガスの種類ごとに異なっていたので、彼の指摘は無視された。

Wilhelm Wien はカナル線の比電荷 e/m を測定し、粒子の質量が水素原子と等しいことを見つけた(1898)。これは質量分析器の元祖である。

一般に陽子の発見者といわれているのは Rutherford⁵ である。彼は 1918 年に α 粒子を窒素原子に衝突させて、陽子がでる反応を見つけた。

6.1.4 α 粒子

α 粒子とは陽子 2 個、中性子 2 個からなる原子核で、放射線の 1 種である。

Rutherford は、1898 年にウランから α 線と β 線がでていることを発見、1899 年に放射線のアルミ箔の透過を調べ、 α 線と β 線を分離、命名した。

1902, 1903 年には Rutherford は α 粒子の比電荷を測定した。

6.1.5 中性子

Chadwick (1932)

6.1.6 Zeeman 効果

Zeeman⁶効果: 原子から放出される電磁波のスペクトル線が磁場により複数に分裂。Zeeman がナトリウムの D 線が磁場中においたときに分裂するのを発見(1896-1897)。

H. A. Lorentz や Larmor⁷ 等による古典電磁気学に基づく理論解析により、比電荷 e/m は陰極線の e/m と一致。

⁵Ernest Rutherford (1871-1937) ニュージーランドの物理学者。1908 年ノーベル化学賞

⁶Pieter Zeeman (1865-1943) オランダの物理学者。1902 年ノーベル物理学賞

⁷Joseph Larmor (1857-1942) アイルランドの物理学者、数学者。

6.1.7 α 線の散乱実験

Geiger⁸ と Marsden⁹ は Rutherford の指導の下に 1909 年に α 線をスリットに通して細いビームにして金箔に当て、硫化亜鉛 (ZnS) の蛍光スクリーンで α 粒子の散乱を調べる実験を行った。大部分の α 粒子はそのまま散乱されたが、大きな角度で散乱される α 粒子が一部あった。

Rutherford はこの実験結果を 1911 年に理論的に解析し、中心に正の電荷を持つ重い原子核があり、その回りを軽い負の電荷を持つ電子が回っているとして解釈できることを示した。

しかしこのようなモデルは古典電磁気学では不安定であり、円運動する電子が電磁波を放出して極めて短時間で電子が原子核に落ち込む。

6.2 作用変数、断熱不変量

古典解析力学で、周期系で重要な

$$J = \oint pdq \quad (6.1)$$

という量 (作用変数、断熱不変量) がある。これは位相空間で軌道が囲む面積である。作用変数は正準変換にたいして不変である。また、周期系があるパラメーターに依存するとき、そのパラメーターがゆっくり変化しても作用変数は変化しない。作用変数は天体力学の周期運動の摂動問題に関して Delaunay¹⁰ により導入された。

1次元調和振動子、つまり質量 m の質点が、復元力

$$F = -kq \quad (6.2)$$

で表される系では、ハミルトニアンは

$$H = \frac{p^2}{2m} + \frac{k}{2}q^2 \quad (6.3)$$

となり、運動方程式は

$$\frac{dq}{dt} = \frac{\partial H}{\partial p} = \frac{p}{m}, \quad (6.4)$$

$$\frac{dp}{dt} = -\frac{\partial H}{\partial q} = -kq \quad (6.5)$$

⁸Johannes (Hans) Wilhelm Geiger (1882-1945) ドイツの物理学者

⁹Ernest Marsden (1889 - 1970) イギリス、ニュージーランドの物理学者

¹⁰Charles-Eugène Delaunay (1816-1872) フランスの天文学者、数学者

その解は

$$q = A \sin(\omega t + \alpha), \quad (6.6)$$

$$p = m\omega A \cos(\omega t + \alpha) \quad (6.7)$$

ここで A は振幅、 α は初期位相、 $\omega (\equiv 2\pi\nu)$ は角振動数で

$$\omega = \sqrt{\frac{k}{m}} \quad (6.8)$$

である。

エネルギーは

$$E = \frac{1}{2}m\omega^2 A^2 \quad (6.9)$$

である。

この場合、作用変数 (断熱不変量) は

$$\oint pdq = \frac{2\pi E}{\omega} = \frac{E}{\nu} \quad (6.10)$$

となる。

6.3 Bohr の理論

6.3.1 Bohr の理論

Bohr¹¹の理論 (1913)

1. 定常状態、エネルギー準位

原子内の電子は勝手な値をとれず、その原子に特有なとびとびの値

$$E_1, E_2, E_3, \dots$$

をとる。

この状態では原子は光の放射を行わない。これを定常状態という。

¹¹Niels Henrik David Bohr (1885-1962) デンマークの理論物理学者、1922年ノーベル物理学賞

2. 量子飛躍、状態の遷移

原子が電磁波の放出や吸収を行うのは、ある定常状態から別の定常状態に移る時である。

振動数 ν の電磁波を放出したとすると、エネルギー保存則より

$$h\nu = E_m - E_n \quad (6.11)$$

が成り立つ。

3. 定常状態においては、電子は通常の力学の法則にしたがって運動する。

6.3.2 量子化条件

定常状態を決めるのに必要な条件が、量子化条件 (quantum condition)

$$\oint pdq = nh \quad (n = 0, 1, 2, 3, \dots) \quad (6.12)$$

である。ただし左辺の積分は qp 平面における閉曲線の囲む面積である。

6.3.3 例

1 次元調和振動子

1 次元調和振動子を考えよう。Bohr の量子化条件 (6.12) と調和振動子の場合の断熱不変量 (6.10) から

$$\frac{E}{\nu} = nh \quad (6.13)$$

を得る。

したがって

$$E = nh\nu \quad (6.14)$$

となる。

さらに

$$\hbar \equiv \frac{h}{2\pi} \quad (6.15)$$

を導入すると、

$$E = n\hbar\omega \quad (6.16)$$

ここで ω は角振動数である。

水素原子

水素原子の問題を考える．簡単のため電子は半径 r の円周上で円運動ををするとする．電子の運動量は大きさ p で、円の接線方向を向く．座標 q を円周にそう長さと考えたと、電子が円を一周するとき、

$$\oint pdq = p \times 2\pi r = nh \quad (6.17)$$

陽子は e 、電子は $-e$ の電荷を持つから電子に働くクーロン力の大きさは

$$\frac{e^2}{4\pi\epsilon_0 r^2} \quad (6.18)$$

遠心力とクーロン力の釣合から

$$m \frac{v^2}{r} = \frac{e^2}{4\pi\epsilon_0 r^2} \quad (6.19)$$

$p = mv$ と、 $2\pi pr = nh$ の関係から

$$r = \frac{4\pi\epsilon_0 \hbar^2}{me^2} n^2 \quad (6.20)$$

$n = 1$ の場合を特にボーア半径

$$a = \frac{4\pi\epsilon_0 \hbar^2}{me^2} \quad (6.21)$$

という。

次に電子の力学的エネルギー E を求めよう．電子の運動エネルギーは $p^2/2m$ 、クーロン力による位置エネルギーは $-e^2/4\pi\epsilon_0 r$ なので、

$$E = \frac{p^2}{2m} - \frac{e^2}{4\pi\epsilon_0 r} \quad (6.22)$$

$r = n^2 a$ の関係を利用すると

$$E = -\frac{e^2}{8\pi\epsilon_0 a n^2} \quad (6.23)$$

となる。

$m \rightarrow n$ の遷移に伴って放出される光の振動数 ν は

$$h\nu = \frac{e^2}{8\pi\epsilon_0 a} \left(\frac{1}{n^2} - \frac{1}{m^2} \right) \quad (6.24)$$

と表される．その結果、Rydberg 定数にたいする理論式は

$$R = \frac{e^2}{8\pi h \epsilon_0 a} = \frac{me^4}{8h^3 \epsilon_0^2 c} \quad (6.25)$$

となる．これはスペクトルから求めた実験値と良く一致する．

6.4 de Broglie 波

電磁波 (振動数 ν 、波長 λ) は、エネルギー E と運動量 \vec{p} が

$$E = h\nu, |\vec{p}| = \frac{h}{\lambda} \quad (6.26)$$

で与えられるような粒子として振舞うことが知られている ($h = 6.626 \times 10^{-34} [\text{J} \cdot \text{s}]$ はプランク定数)。これを光子と呼ぶ。なお、光子はさらに質量 0 の粒子と考えられるので、 $E = c|\vec{p}|$ が成り立つ。

一方物質粒子も (1) 式の関係で与えられる振動数・波長の波動として振舞うことが知られている。

$$\nu = \frac{E}{h}, \lambda = \frac{h}{|\vec{p}|} \quad (6.27)$$

これを de Broglie¹²波 (1924) と呼ぶ。

6.4.1 de Broglie 波と量子化条件

Bohr の量子化条件と、de Broglie 波には密接な関係がある。水素原子で半径 r の円運動を考え、電子に伴う de Broglie 波の波長を λ とする。円周の長さが波長の整数倍となる条件は

$$2\pi r = n\lambda \quad (n = 0, 1, 2, 3, \dots) \quad (6.28)$$

である。これに $\lambda = h/p$ を代入すると

$$pr = n\hbar \quad (6.29)$$

と表される。すなわち、電子の角運動量 pr は \hbar の整数倍になり、Bohr の量子化条件と同一になる。

6.4.2 粒子と波の二重性

6.5 その後の発展

Bohr の理論は対応原理を元としたものである。このながれはやがて Heisenberg¹³の行列力学 (1925) へとつながっていく。

¹²Louis de Broglie (1892-1987) フランスの物理学者。1929 年ノーベル物理学賞

¹³Werner Heisenberg (1901-1976) ドイツの理論物理学者。1932 年ノーベル物理学賞。

一方 de Broglie の物資波のアイディアは Schrödinger¹⁴の波動力学 (1926) へとつながる．彼とは独立に (やや早い?) Lanczos¹⁵が波動力学と同等な方程式を導いている．ただし、彼の導いた方程式は積分方程式の形である．

両者は全く異なるように見えながら、両方とも量子力学の問題をきちんと解くことができた．水素原子では角運動量や遷移強度 (確率) までふくめて正しく計算できた．

両者が数学的に等価なことは Schrödinger, Lanczos, Pauli¹⁶が示した．

当時は Schrödinger 形式の方が馴染みやすかったので教育でも良く採用されているが、電磁場の量子化には Heisenberg 形式の方が馴染やすい．

場の量子論へ発展していったのは Heisenberg 形式から生成消滅演算子をへてのことである．

別の系列として Feynman¹⁷の経路積分がある．ゲージ場の量子化には威力を発揮する．

¹⁴Erwin Rudolf Josef Alexander Schrödinger (1887-1961) オーストリアの理論物理学者．1933年ノーベル物理学賞．

¹⁵Cornelius Lanczos (1893-1974) ハンガリーの数学者、物理学者．

¹⁶Wolfgang Ernst Pauli (1900-1958) オーストリアの理論物理学者．1945年ノーベル物理学賞．

¹⁷Richard Phillips Feynman (1918-1988) アメリカの物理学者．1965年ノーベル物理学賞．